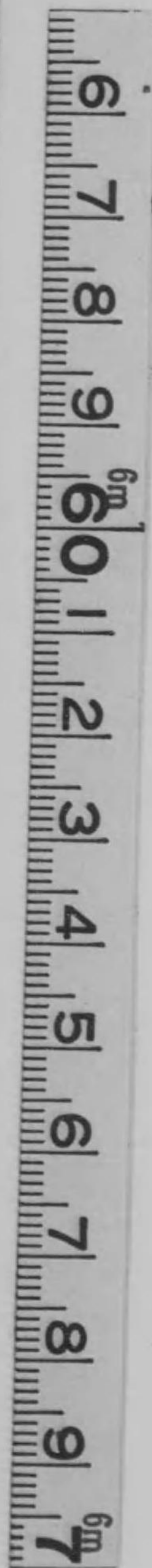


360

283



始



360-283

久留島武彦著

通俗
雄辯術

東京 廣文堂書店發行

大正
5. 1. 15
丙交

講演の始まりは、演壇上に立ちて第一語を出したる
時よりや。会場に入りたる時よりや。將又講演を
約したる其の承諾の即時よりや。この三者に對する
見解の如何に依りて、講演が講演の目的に對する覺悟
の如何も察せらるべし。

著 者

如何に人と語る

三田島洋子

これ迄に私は能く「話はどうすれば宜う御座いませうか」と云ふ質問は受けた。が、決して「話はどう云ふ風に聴くものでせう」と尋ねられたことがない。これは實に駭くべきことであると思ふ。併し政論壇上に立つ人から幼稚園の保育室に周旋する保母迄も、猶ほ其の軌を一にしてをる。この質問を受ける毎に私

は、實に話術徹底の前途は瞭遠であると考え、行かぬのである。

かう云ふ處からスタートしたものは、假令其の堂に登り、奥を極めたと云ふ人でも、その事に精しくなればなる程、所謂味噌の味噌嗅きを發揮する。即ち是等の人々達が受ける批評は——演舌使、或は話家、悪く云へばおしやべりと云ふものであらう。それは當然の事であり、決して無理からぬ次第である。と考へる。が、何故に其の事に精しく、相手を動

かすの力が少いかと云へば、畢竟するに自己を説く許りであつて、毫も相手と語つてゐないからである。こゝに此の『通俗雄辯術』に收めた諸篇は、要するに私の話術研究の結果を報告する断片的のものに過ぎぬ。而して私は未だ辯舌道に於いては、僅かに小學生に過ぎない。が、最も私の苦心する處は、如何に人と語らんかと云ふことである。この意味を改めて此處に私が細叙するよりは、本書を精讀せられる事に依つて、或は充分に私の苦心を認められることゝ

思ふ。而して更に此の意味に於いて、若し此の小冊子が辯舌道に熱心なる同志に、在來と違ふスタートを持たなければ、到底其の志を達することが出来ぬと云ふ事を合點せしめ得るならば、この上もなく私は満足を感じるのである。(御大典の翌朝早蕨園にて)

目録

第一篇 序論

講演卸小賣

- 口の商賣ありや……………二一—二六
- 學商とは何ぞや……………二
- 奇問に妙答ある……………五
- 對報酬觀念とは……………九
- 遊動大學の講師……………一六
- 一般社會へ注文……………二〇

第二篇 研究

根本は何れにありや

- ◎ 根本的の誤解は……………二七—四四
- ◎ 聲の取扱方とは……………三四
- ◎ 言葉の調子にも……………三六
- ◎ パーカーの研究……………三九
- ◎ 根本を忘れるな……………四二

邪魔な手足か

- ◎ 態度は如何する……………四五—六六
- ◎ 無言の雄辯とは……………四九
- ◎ 頭から爪尖まで……………五三
- ◎ 必要なる準備は……………五六

時間と場所と

- ◎ フォーマンの注意……………五九
- ◎ 態度の始りは？……………六二

聴かす用意

- ◎ 選定の必要とは……………六七—八三
- ◎ 習慣より便宜へ……………七一
- ◎ 黒装された演者……………七七
- ◎ 其の他の用意は……………八一
- ◎ 二様の準備作業……………八四—一〇五
- ◎ 会場選定の必要……………八六
- ◎ 講演者に敵とは……………九〇

(四)

◎ 空気の移動如何……………九三

◎ 呼吸の保護法は……………一〇〇

聲にも人格あり……………一〇六—一〇八

◎ 悪聲を修練する……………一〇六

◎ 雄辯五本骨とは……………一〇九

◎ 自在性とは何か……………一一六

言葉の選擇とは……………一一九—一四三

◎ 武器の鍛練如何……………一一九

◎ 言葉研究の歴史……………一二三

◎ 相手を知れりや……………一二八

◎ 平明より單純へ……………一三三

◎ 談話をも亦描け……………一三八

講演者の壓力……………一四四—一五六

◎ 精神の充實如何……………一四四

◎ 第一要件の忘却……………一四七

◎ 講演者と氣分と……………一五〇

第三篇 批評

雄辯研究の第一義……………一五七—一七一

◎ 登壇前の準備は……………一五七

◎ 呼吸の調和とは……………一五九

◎ 口に缺點なきや……………一六六

◎ 態度を如何する……………一六七

(五)

聴衆として

- ◎時間言語及音調……………一六九
- ◎雄辯家の資格は……………一七二
- ◎いろくゝの感想……………一七七
- ◎粗野至極の態度……………一八二
- ◎江原先生の忠告……………一八七
- ◎我輩の立場から……………一九〇

帝劇にて

- ……………一九三—二〇五
- ◎調和せる態度よ……………一九三
- ◎癖と其の態度と……………一九七
- ◎巧妙なる雄辯哉……………一九九

◎瀟洒なる才度？……………二〇二

第四篇 資料

良工苦心の痕……………二〇六—二一一

- ◎俳優と宗教家と……………二〇六
- ◎露に配する牧童……………二〇九
- ◎眼でも亦述べよ……………二一五

組立法の注意……………二二二—二四二

- ◎波瀾活動の照應……………二二二
- ◎巧妙なる説明法……………二二三
- ◎人物配列の手腕……………二二九
- ◎心理作用の説明……………二三五

回字會にて

- ◎局面轉換の必要……………二四一
- ◎問答體の效果は……………二四三—二七六
- ◎話術と其効果と……………二五二
- ◎威嚴の代表とは……………二六四
- ◎如何に手を置く……………二七〇
- ◎方言の取扱は？……………二七三

第五篇 参考

米國於ける通俗講演

- ◎通俗講演の種類……………二七七—二八五
- ◎組織的通俗講演……………二七八
- ◎非組織的通俗講演……………二八一

第二 移民と教育

- ◎組織的講演の意義……………二八六—二九九
- ◎カイゼルの遺算……………二九三
- ◎教育と國民化……………二九八

第三 米國の國情

- ◎不安と危険と……………三〇〇
- ◎國旗と小學生……………三〇二
- ◎我が國は如何……………三〇六
- ◎時勢の要求なり……………三〇七

第四 眼目と方法……………三〇八—三二二

◎ 思想上の設備……………三〇八

◎ 言語上の用意……………三〇九

◎ 紐育市の施設……………三一〇

第五 講演の種目……………三一三—三三七

◎ 効果の徹底……………三一三

◎ 社會問題の意義……………三二二

◎ 計畫の不徹底……………三二八

◎ 進取的國民と地理談……………三三〇

第六 講演の實際……………三三七—三八〇

◎ 會場の問題……………三三七

- ◎ 時間規定……………三二五
- ◎ 會場の模様……………三五四
- ◎ 熱心なる聴衆……………三六一
- ◎ 徹底せる會合……………三七〇
- ◎ 婦人と聴講趣味……………三七三
- ◎ 他山の石として……………三七八

跋——辯舌道のみは



通俗雄辯術

久留島武彦著



(著者の上壇演)



第一篇 序論

講演卸小賣

□口の商賣ありや この頃私共は能く世間の噂に「口の商賣」と云ふことを聞くやうになつた。が、これは一寸耳新しい言葉である。それでは此の所謂「口の商賣」と云ふことが何を意味するものであるかと云へば、そこには深い理由があるのである。

近時に至つて世の中の人達が著しく知識慾に驅られて、何物をか求めやう。而して平生から渴仰してをる處を満足させやうとする

傾向は、異常なるものであつて、これは少しく社會の實際を知れるもの、首肯する處であらうと思ふ。然るに一方には、かう云ふやうに世人が新知識の獲得に渴仰してをると共に、又他方には、勃然として辯舌が盛んになつて來たと云ふことは、洵に面白い現象と申さねばならぬのである。

それ故に此の新知識に渴仰せる人達を満足せしめる爲には、勢ひ此の辯舌を以てするに勝るものはない。されば近時に至つて、かの講演會、講習會と云ふやうなものが各地方に盛んになつて來た。この異常なる傾向は、夙に何人も認める處と思ふのである。

この新進の事業——即ち地方講演會に對して、最も必要なるものは何であるかと云へば、今更に説くまでもあるまい。第一に適當なる講師である。その講師は何處から出るかと云へば、先づ中央から

出る。而して地方の人も亦これを切望してをるのである。然るに——こゝに怪しむべきものは「口の商賣」なる言葉である。所謂「口の商賣」なる名稱は、取りも直さず、前に云つたやうな講師又は名士を指すものである。否な、その外に好く世間で演説などをする學者、名士をも指すのである。例へば大隈伯などを目して、世間の人には法螺を吹くと云ひ、誰は大風呂敷を廣げると云ひ、何某は喋舌すると云ひ、更に某氏は饒辯だと云ふ。是が即ち前に耳新しい言葉だと云つた「口の商賣」の深い理由である。この「口の商賣」と云ふ言葉が既に冷笑的のサウンドを含んでをる許りでなく、事實未だ世間の人達は、多く言論を上下する人、演説を多くするものを冷笑的に見てをるのである。

こゝに私は理屈を云ひたくない。而して是非を論議しやうとする

ものでもない。が、確かに此の世間の冷評は、面白いものでないと思ふ。否な、近時の異常なる速度を以つて要求しつゝある社會の傾向に對して、決して満足を與ふる所以でもないと思ふ。換言すれば、社會教育を妨害するものであると痛論しても、敢て差支へはあらずまいと信ずるのである。

二

回 學商とは何ぞや この事から致して、私の思出さるを得ないの

は、嘗つて某紙が文學博士谷本富氏を攻撃するに「學商」と云ふ語を須
 ひて、盛んに谷本博士が講演料の多額を食ふことを痛罵したことで
 ある。私も谷本博士に就いては聞込んでをることもある。が、兎に
 角に其の他のことは措いて暫く問ふまい。併し谷本博士が講演料を
 多く食ふると云ふことを以つて「學商」とけなし、冷罵し、いやしめたこ
 とは、果して當然なりと申すことが出来るであらうか。
 何れにしても、今日の世の中の人達が講演など致して、その報酬
 を得ることを「口の商賣」と冷評し、或は「學商」であると痛罵しつゝあ
 ることは、確かに事實である、全く眞實である。併し靜かに考へて
 見るならば、かの學問は學問の爲の學問でなければならぬと同時に
 又世間の爲の學問でなければならぬ。言葉を換へて申せば、學問の
 活用と云ふことが大切であり、今日の時勢、社會の新傾向より遠觀

して、最も必要なものであると云ふことは、夙に識者の認めてをる
 處であると思ふのである。
 果して然らば、相互の利益よりして、私は谷本博士の如き學商の
 出ることが刻下に必要の事であると思ふ。私は谷本博士のやうな學
 商の一人でも多く出るやうにすゝめたい。最も歓迎すべきことでは
 ないかと思ふ。私は今日の時勢に對して、最も必要なのが此の種
 の人物である——と聲を大きくして申したいのである。
 ここに私は別に理屈を列べるのではない。が、今日の如き過渡時
 代に於ける社會ほどあらゆる知識——輕便なる學問を要求するもの
 はない。世の中の人達は、それに渴仰してをる。この世の中の人達
 に輕便に知識を授ける、即ちあらゆる學問を極く通俗にして、しか
 も好く徹底するやうに授けると云ふことは、最も時勢に必要なこ

とであると共に、その人は四方八面に當るものでなければならぬ。而して現代は如何なる境遇にも應酬することの出来る講演者の最も必要なる時であるのである。

然るに世間を見渡す時は、人物は多い。併し人材は少いものであると云ふ歎聲のあるやうに、この廣く、多くの知識を渴仰してをる世の中の人達を満足さしてをるものは甚だ少い、世間の要求に應ずるには足りない有様である。あの知識慾に渴仰せる人達に満足を與へてはゐなくて、こゝに早くも口の商賣とか、或は學商とか云ふやうな冷笑を以つて罵詈するもの、少くないに至つては、實に駭かざるを得ない。そこで私は此の時勢の一大缺陷を補はむが爲に、今少し世間の所謂批評家なるものが襟度を寬くして、社會の新傾向に注意せられるやうに切望するものである。

三

回奇問に妙答ある 何れにしても深遠なる學理を善く聽者の肺腑に徹底するやうに、通俗に講演する事を希望する社會の新傾向に對して、最も適切なりと考へられるのは、谷本博士の講演であると思ふ世の中の人達に聽かせるものとしては、最も必要なるものであると思ふのである。

それでは此の谷本博士に對する世の中の非難と云ふは、果して如何なるものであるかと云へば、實に「あの博士は高い講演料を食るか
ら……」と云ふにある。その外のこととは云ふ必要はあるまい。が。谷本博士の講演料は博士が自ら公言してをるやうに——一時間廿五圓より以下では應ぜぬ。而してそれが又二時間又は二時間半位宛一口

に講演して七日乃至十日と繼續する。それ故に一寸谷本博士を招待すると云へば、三百五十圓乃至五百圓の講演料を拂はなければならぬことになる、然るにこれに就いて頗る面白い珍談がある。美作であつたか。兎に角に中國の或地方の夏期講習會は谷本博士を招待した。先づ講習會は無事に終了して、愈々講師慰勞の宴を張るに至つた。その席上で餘程に黄金湯の利益があつたらしい頃に、突如として列席の一新聞記者は立上つた。而して主賓なる谷本博士に二個の奇問を發したのである。曰く

『自分は之れまで谷本博士を我が學界の巨人として、不斷に非常なる尊敬を拂つてをつた。それで、何時かは先生の警咳に接したいと希望してをつたので、前年京都に出でた折を好機會と思つて或日の午前十時頃に先生を其の邸に訪問した。私は此の訪問に依

つて、せめては日頃から自分の渴仰してをる——或物を満足せしめることが出来るであらうと多大の期待を致してをつたにも拘らず、遂に自分は失望せざるを得なかつた。と云ふのは外でもない自分が博士の玄關で接した取次の人の言葉は「未だ先生は御寢中でありませす」と云ふのであつた。それが抑々自分の先生に質したい處である。苟くも一代の學者として、世の師表たるべき博士が十時までも床の中にあるなど云ふことは、どう云ふわけであるか。之れが自分の博士に問ふべき第一の疑問である」と。

この無遠慮なる質問は、満座の人達に冷汗を握らしめて、今まで楽しく飲み、且つ食つてをつた連中は、遽かに呆氣に取られてをるが、その酔へる一新聞記者は、日頃の鬱勃たる不平を晴したいと云ふ勢ひで、更に第二の矢をも賓客に放つたのである。曰く

「それから自分は、第二に博士に質問したいと思ふことがある。それは何故に博士は多額の講演料を要求せられるのであるか、即ちこれである」と。

この質問者の語氣は、烈しきこと火の如く、列座の連中はケロリとなつて、もうなす處を知らない。折角無異に講習を終つて、慰勞會と云ふ此の席上に、恚ることを露骨に質問するとは何事ぞと全く其の顔からは火が出るやうにもある。然るに流石に谷本博士は動ずる色もなく、肅然として立上られた。而して某氏の質問に對して博士は、頗る珍な答をされたのである。曰く

「某君が私を訪問された時に引見することを得なかつたことは、それは實に氣の毒であつた。が、私は平生から考へてをることがある。それはかうして自分を一代の學者と云ひ、巨人として、世

の中の人達が尊敬してくれる。それには私にそれ相應なものが附いてをるから尊敬せられるのである。思ふに此の尊敬たるや私が今日まで刻苦精勵、以つて怠らなかつた賜である。さうして見れば、私は此の世間の私を尊敬して下さる——その念を少しでも減少さすやうなことがあつてはならぬと考へる。それで私は愈々研究究に努めねばならぬ。

然るに世の中の人達は、決して私の此の心を諒とすることなく幾百、或は數千の人達は、私を訪問してくれる。けれど若し私が此の訪問者のすべてに接してをつたならば、私は私の研究を妨げられることがある。特に必要にして、且つ重大なる研究を中途に妨げらるゝが如きことは、到底私の僥びがたきことである。それで心ならずも、私は床にあると云ふ辭の下に訪問者を拒むことも

ある。某氏の訪問の時も亦丁度かゝる事情の爲にお氣の毒であつた。併し谷本の微衷を諒として下さる方は、私の此の行爲を諒として下さることと思ふ』

と云ふやうな意味を滔々と其の快辯に任せて説明したので、流石に學者としての抱負は違つたものであると冷汗をかいた連中も感心して傾聴する。然るに谷本博士は息をもつかせず第二問に應じて、

『唯今某氏は私が多額の報酬を食ふやうに申された。が、この谷本は、かの報酬が講演に對して、決して不相應に高いものでないと堅く信じてをる。何故かと云へば、私はかうして諸君に招待せられて講習會に臨むに當つては、決して杜算なる準備をして來るのでなく、少くとも一年なり、或は半年なり、私に出來る丈けの研究を致して、數十冊、數百卷の参考書を涉獵し、讀破すること

を一種の内規としてをる位である。この外に、更に私は参考書を購求せねばならぬ。その他の準備の爲に費す處は、決して少くない。それであるからして、諸君には多額に見える谷本への報酬も私から考へれば、決して多額ではないのみならず、時としては、殆んど其の費用を償ふことが出來ないことさへもある。が、若し谷本が多額の報酬を食ふものとせらるゝならば、爾今以後、決して私を御招きにならぬやうに……』

と冷然として、某氏に應ぜられたと云ふ。併し此の谷本博士を招待した地方の教育會は向二ヶ年間に渡る借金をして、辛うじて其の講演料を拂つたと云ふ。これは私も地方の人から傳聞したことであつて、素より眞偽は保證の限りでない。が、谷本博士を知るものには、如何にも似合つた話だと首肯せられることと思ふ。兎に角に此

の材料ほど此の頃よく云ふ「學商」に對する現代の兩面の缺陷を表示せるものはあるまいと考へるのでなる。

四

回對報酬觀念とは 私の實驗に依るも、猶ほ今日の講演者に對する報酬のやうに不規則ものはなく、而して異なるものはあるまいと思ふ。或時は多く支拂ふこともあり、多からぬ報酬のあることもある。が、それも素より比較的のことであつて、或時は殆んど準備に報ゆる丈けも拂はぬことがある。それ故に——私共の勞力と云ふものは、全然打算されないことになつてをるのではないかと思はれるやうなことさへもあるのである。

然るに事情を知らぬ多くの世の中の人達は、一齋に之等の講演者

に向つて、如何にも羨ましさうに「旨いものだ、べら／＼一寸喋舌つて、これ／＼になる」と云ふ。而して彼等は講演者に拂ふ報酬を多額であると思ふてをる。實に誤れるの甚だしいものであると申さねばならぬ。こゝに私は直言する——今日の一般の講演者に拂ふ報酬と云ふものは、尠くはあても、決して多くはない。これは事實であるつゆ程も伴りない處である。

世の中の人達は私の中すことを信ぜずして、講演者に多額の報酬を拂つてをると思ふてをる。而して講演者は不合理なる報酬を貪るものとも信じてをる。が、それには又頗る理由のあることがある。或は無理でないと思へることもある。それは夏期講習會などで全國に於ける府縣、郡教育會などの招待に應じて、こゝに中央から出張せられる所謂御歴々の名士がどう云ふ報酬を取つてをるかと思へば

地方の民度、生活の程度より見て、著しく法外な報酬を取つてを
のは、確かに事實である。名士が東京の住所にあつて、月々に得る
處の収入に數倍する報酬を僅かに七日、又は十日の間に取つてを
これは事實である。で、地方の人達には、非常に多額に見えるのも
無理はないのである。

苟くも社會の一員としては、相互に犠牲的の生活をして行くとい
ふ考へがなければならぬ。それ故に世に立つて、先覺者を以つて任
ずる士は「どれ丈の準備が掛つたか」と云ふやうな慾張つた計算など
することをせず、地方民の知識開發の任に喜んで當らねばならぬ
と私は考へてをる。こゝに於いて私は今日の急務中の急務として、
最もよく犠牲を解する學商の輩出を望むものである。
それと同時に、又社會の人達も亦努めて此の講演者を好遇するこ

とが必要であると思ふ。換言すれば、自ら求めて自己の知識慾の渴
仰を満足せしむべきであると思ふ。然るに今日の社會を通觀する時
は、果して無いのであるか、又は嫌ふのであるか。この社會教育の時
講演者と云ふものが甚だ乏しいのである。近頃は内務省が地方青年
團に精神的教育をしやう、社會教育を授けやうとしてをる。が、そ
れを托すべきものがない。それ故に止むことを得ず小學校長、郡視
學、中學、師範學校の職員と云ふやうなものを以つて當てゝをる状
態である。併し之等の人達には、既に多忙なる本職がある、責任が
ある。されば思ふやうに講演會を開き、青年會に満足と與へること
も出来ないのである。
かう云ふ状態であるからして、私は今日に於いて最も欲しいと思
ふのは、犠牲をよく解する名士が頻々として中央から地方に出演せ

られるやうにしたいと云ふことである。

五

回遊動大學の講師 自由劇場と云つたやうに、何處にでも講演會を開いて、世の中の人達の知識開發に努めると云ふことは、刻下に於ける大切な事である。然り、而して之等の講演者を目して遊動大學の講師と云ひたい。この名譽ある遊動大學の講師として、私の最も適任なりと思ふものは、新渡戸博士、志賀重昂氏、名本博士の如き名士である。之等の人達は、決して一學校、一學會、一部分に占有せらるべきでないと思ふ。併し之等の人達は、高等の通俗講演者であつて、今日更に必要なるは、中等の通俗講演者である。で、若し辯論に經驗あり、而して辯論を以つて精神作業であると自負するも

のは、未だ耕されざる畑、廣茫たる天地に立つて、國民教育の遊動大學の講師として自任するも亦愉快ではあるまいか。それでは如何なる方面から行くべきかと言へば、こゝに一例を擧げる。即ち南極探検と云ふことがあるとするならば、直ちに南極は如何なる處、如何なる地位にあり、どう云ふ地方である、歴史はどうである、將來は如何と云ふやうなことを調査して、これを國民に知らしめるとか。又は今日流行の飛行機、飛行船と云ふ問題に就いて、果して兩者の區別をし得るものがどれ丈けあるだらうか、恐らくは小學校の教師などには分らぬものが多いであらう。それ故に是等の知識を國民に明確に諒解せしめると云ふことが講演者の任務であつて、その責任も亦決して軽いものでなく、頗る重視されるべきものであると思ふのである。

最も簡単に云へば、かう云ふやうなものである。今日社會教育の
必要なる時に當つて、天下有爲の青年が憊る犠牲的の方面に向ふの
も亦大に國家の爲に歓迎すべきことであると信ずるのである。

六

回一般社會へ注文 更に社會の方から云へば、憊る遊動大學の如き
ものが出現したならば、第一に打破せねばならぬのは報酬と云ふこ
とである。金錢を出すを忌むべきことと思ふてをるかと思へば、決
して左様でなく、繼續的の夏期講習などには相應に拂つてをりなが
らも、臨時的の講演には出すことを躊躇してをる。講師が旅費、宿
泊料を拂ひ、小使を費消してやつてをると云ふことは、明かである
にも拘らず、猶ほ土地の製作品でも謝禮にせねば失禮になるとでも

考へるのか、わざ／＼手間を掛け、且つ暇を潰してをるのである。
私が或地方に行つた時に、その地方は真綿の名産地であつたので
謝禮として真綿を贈られた。これは歸つたら妻子が蒲團に入れると
喜ぶことだらうと考へて、私が悦んで納めると又次の處でも真綿と
云ふやうに、遂に五六個所で真綿攻めになつた。然るに次の地方で
は桃の罐詰の産地であつたので、到る處で之れを謝禮として受けて
實は大に閉口したと云ふやうなこともあり、金澤では九谷焼の菓子
皿を五六個所で貰つて、歸京後にそれを知人に分けたと云ふやうな
笑ひ話もある。又或地方では報酬に金錢を出すのが如何にも失禮
であると思ふたのか、私が出發しやうとする時に小學校長が訪問し
て来てまじ／＼してをる、その小學校長は私に講演の報酬として金
錢を出さうとするのである。が、唯だ「どうも失禮を……」と繰返して

何時迄も躊躇してをるが爲に、私は多くの時間を消失した許りでなく、更に汽車に乗り遅れて、遂に次の地方の人達に迷惑を掛けたこともあるのである。

かう云ふことは、實に好くないことである。それが又或人になると心には金銭にして報酬を欲しながらも、猶ほ表面には心にもなく之れを固辭すると云ふやうなこともある。こゝに於いて私は正當なる勞力に對する相當の報酬は受けても差支へないと思ふ。若し正當なる報酬を受けて、こゝに品性に拘るなど思ふやうなあやふやな人格の人であるならば、最初から社會教育の任に當らぬが宜しい。断じて講演をやらぬがよいのである。物品を受ければよいけれど、金銭を受ければ講演が安つぽくなると思ふやうなもの、講演の値打は全然ゼロであると申したいのである。

兎に角に講演者の方から申しても、社會教育、國民の知識開發と云ふことを主眼として講演もするのであるからして、或時は自費でやるも宜しい。行きあたりばつたりの決心でやるならば、社會は今日講演者を求めてをることであるから、必ず歓迎するに違ひないと私は信ずる。報酬を與へる、與へないなど云ふが爲に、出張するとかしないとかと云ふのは、卑劣であつて、之等の輩は到底尊敬すべき遊動大學講師の資格なきものと云つてもよいのである。

それであるからして、社會も亦此の犠牲を解し、社會教育に一身を捧げらるゝ名士に對しては、それ相應に、又は實費を拂ふと云ふことをせねばならぬ。これはわけのないことであつて、例へば或者は郡で講演者を招く時には、甲から乙に至る間は甲乙で費用を負担し、乙から丙に行く間は乙丙、丙から丁に行く間は丙丁……と云

ふやうにし、又講演者はその土地の品位ある家に宿泊せしめると云ふやうにする。而して相應なる待遇と報酬をするやうにするが宜しいと考へるのである。

之れを要するに、社會の人達に對しては、決して講演者に報酬を惜しむやうなけちな考へを持つてはならぬと云ふことである。否、自分等の知識を開発して、くれる無限の賜を感謝すべきである。物質上のことを彼は云ふが如きは沙汰の限りである。然り、而して講演者の方でも、かの報酬など云ふことは眼中に置かず、その貴き天職を盡すと云ふ考へを以つて、可成的に地方に出張すると云ふことにして貰ひたいと思ふ。この主張を生平より抱く處の私は、こゝに特に此の持論を力説して、而して靜かに話術研究の歩を進めたいと考へる次第である。

第二篇 研究

根本は何れにありや

—

回 根本的の誤解は 世間で能く『あの人の咽喉は震付きたいやうに好い』と云ふことを申してをる。而して是は談話にも、演説にも、或は講義するにも、その根本となるべきものは咽喉であるといふことを意味してをる。世の中の人達も亦演説の旨いのは、唯だ咽喉が好い爲だと信じて疑ふものがないやうである。が、私は之れは根本的の誤解であると思ふ。僅かに咽喉使用を以つて、演説又は談話が旨い

とか、或は下手だとか云ふのは、決して至當なる觀察でない。私の考へる處では、この咽喉はすべての基礎ではないのである。

あの有名なる盲目であり、且つ聾啞であるヘレン・ケラー女史は、最初に他の人の談話を解する爲に、人と對話する時は、直ちに其の手指を相手の舌頭に觸れて「あゝ今は何を云つてゐるなア」と了解してをつた。が、併し之れは餘りに穢いので、その次には、相手の咽喉に手指を觸れて、その談話の意味を知ることにしてゐるなど云ふ實例より見れば、この咽喉も亦餘り演説などに有力でないと云ふことも出來ない。が、それは眞に枝葉の問題に過ぎぬ。この咽喉の使用と云ふことは、談話又は演説に於いての第一義でない。誰でも菓實が幹に生ずるものでなく、その枝に生ずるものであると云ふことは知つてゐる。而して其の枝は幹より生じ、その幹に又根があるや

うに、この咽喉の使用と云ふことは、その幹となり、又は根となるべきものではないのである。

今日太平洋、大西洋及び印度洋を航行してゐる汽船に——我が國でも東洋汽船だとか、或はピーオー會社及びジャーマン・ロイド會社等の汽船に乗込んで、こゝに長途の海上旅行の樽を散じ、又は乗客の徒然を慰籍する爲に、最も妙なる音曲を弄してゐる音樂師は、總て伊太利人である。が、伊太利人は天性的音樂師たるべき素質を有して、假令裏店に住んでゐる憐なる貧民でも、猶ほ一曲の調べを優にするに云ふ位に音樂的國民である。が、この伊太利に「咽喉を有たぬ伊太利人」と云ふ諺がある。これは決して彼等が咽喉で歌ふのでないといふことである。眞の音樂は咽喉の使用のみではないのである。こゝに於いて咽喉以外の聲の本元となるべきものがな

ければならぬ。それは云ふ迄もなく、肺臓の活動に依つて起る呼吸であつて、これを第一に注意せねばならぬ。正しい音は肺臓の活動に依つて出るものである。決して私は咽喉を使用すると云ふことが演説又は談話の上に無用なものであるとは云はぬ。が、要するに枝葉の問題である、一種の道具に過ぎないのである。その根本義は、この肺臓の活動に依つて起る處の呼吸にある。正しい音はこゝから來るので、呼吸は肺臓の活動を示すものであるからして、演説又は談話に就いて、この呼吸と云ふことに注意する人であるならば、咽喉の使用と云ふことは知らなくても、その効果を充分に收めることが出来るのである。

我が國では能く寒聲を取ると申して、この咽喉の練習をやることをしてをる。山や海で大聲を出して、或時は咽喉から血が出る迄に

やる。而してそれで辯舌の練習は卒業したものとしてをる。かく練習した上は演説でも、或は談話でも、不斷に上手にやれると云ふやうに思つてをる、又現に之れを奨勵し、實行してをるものもあるやうである。が、私は之れは未だ其の枝葉——演説又は談話などの道具の一つを練習してをるに過ぎないのでと思ふ。この外に根本義を閑却してをるのである。

かう云ふやうにして其の咽喉の使用を重大視し、咽喉の練習と云ふことを過信してをる我が國の辯舌に志す人達でありながらも、猶ほ辯舌の根本義たるべき肺臓の活動より來る呼吸と云ふことに、毫も留意するものゝないと云ふことは、實に斯道の爲に遺憾に堪へない次第である。

こゝに辯舌に志す世の中の人達が肺臓の活動より來る呼吸と云ふ

ことに注意して、その活動又は其の音の程度と云ふことを深く自ら考へ、その音響の強弱はどうかと云ふことをよく察して、その次には如何なる用意をせねばならぬかと云へば、第一に其の「呼吸は正確なりや」と云ふことをよく考へると云ふことである。而して其の呼吸が正しい、確かな音であつて、強弱なども遺憾ないものとしたならば、今度は其の呼吸を自由自在に、自己の欲する儘に使用する事が出来るかどうかと云ふことを考へることは、最も深く留意しなければならぬ處である。

それから呼吸の全部を聲として使用することが出来るものだとしたらば、その次には呼吸が洩れてをるやうなことはないかと云ふことを考察することを忘れてはならぬ。これは最も大切なることであると思ふのである。

この實驗をするには、例へばA即ちAと云ふ音を出して息をして見る。Aと云ふ其の呼吸を長く引いて、その音が始より終まで正しいAと云ふ音になつてをるかと言ふに、その一部は正しいが、一部は不確なものになつて消えろとか、その一部は聲になつてをる。が、その一部分は息となつて、外部に泄れてをると云ふことを發見するかどうか。これで能く其の呼吸の強弱を知ること出来れば、又其の音の正確であるか否かと云ふことも、こゝに實驗することが出来るのである。

又之れを例へて見れば、電燈のやうなものであつて、若し何燭光と云ふものがすべて光になるものであつたならば、決して今日の電力は要しない。唯だ今日の電力の十分の二あれば足りるわけになるあの十燭光の電燈も十分の八は熱になつて發散し、眞に光となるも

のは、その二に過ぎないやうに、この呼吸も亦長く息してをる間には洩れて、残るものは僅少になるのである。

二

回聲の取扱方とは　その呼吸が聲になれば——其の呼吸が聲になつた場合には、如何なる取扱ひ方が必要であるかと云へば、その聲が正確であり、自由自在に使用することが出来るかと云ふことを考へなくてはならぬ。この聲が正確でなく、その使用が自由自在に出来ないでも、人の耳には聴かれる、物事を説明すると云ふことは出来る。甲も談話が出来、乙も亦辯舌が出来、丙も丁も同じやうに説明すると云ふことは困難でない。何人でも敢て出来ないことはない。併し聲の取扱ひ方の正確であり、自由自在に出来ること

は、唯だ單に説明すると云ふことではない、聴衆を感動せしめると云ふことがなければならぬ。然るに此の聲の取扱ひ方と云ふことに注意しない爲に、人を動かすと云ふことが出来ないのである。例へば、こゝに桃と云ふものがある。その説明は誰にも出来るであらう。聲が正確でなくとも、自由自在の使用が出来なくとも、不十分ながら人には分ることは分るであらう。が、それが決して本意ではない。これで能事は既に終れりとするものがあるならば、私共は俱に辯舌道を語るに足らない徒輩であると云ふことを敢てするであらう。人の耳に能く分るやうに、而して其の音響が正確であつて更に其の聲を自由自在に使用が出来たらば、聴衆をも感動せしむることが出来るのであるからして、聲の取扱ひ方は、決して忽にすべきものでない。苟くも辯舌道に志す士の大に留意せんければなら

ぬものであることは勿論である。が、これにも餘り心するものゝないのは、窃かに私共の遺憾に堪へぬ處である。

三

回言葉の調子にも 同じ調子で談話なり、又は辯舌をしてを つても 眞の言葉の調子と云ふものが出なければ、何の役にもたぬものである。如何に高い聲が出て、どれ丈け大きな聲が出て、調子言葉に調子と云ふものが出なかつたならば、何等の面白味もない。その談話なり、又は辯舌には、何等の光彩もなく、何等の價値もないものになるのである。言葉に調子がなくとも、聲の取扱ひ方を知らなくても、人の耳に聴え、物事の説明が出来るやうに、勿論、説明すると云ふことは出来る。これには敢て差支はないであらう。が

矢張り人を動かすと云ふことになれば、遂に無効である、駄目である、つまりぬものである。

演説者にとつて、この聲の取扱ひ方は、前に述べたやうに、實に重大なるものであつて、多數の聴衆の前に立つて、唯だ人の耳に入らせるると云ふこと——物事の説明をしようと云ふこと以外に、最も重大なるべき人を動かすと云ふことをしやうとするには、勢ひ其の聲の句切と云ふこと、揚抑と云ふことを注意せねばならぬやうに、言葉の調子も亦正確であるか、不正確であるかと云ふことを能く考へなければならぬ。而して其の言葉の調子が聲の取扱ひ方に於けるやうに、自由自在に、自分の思ふ儘に、我が欲する儘にならねばならぬ。その場合に應じて、最も巧妙に其の言葉の調子を照應せしめると云ふことを考へねばならぬ。これは辯舌道に志す天下の士の決し

て閑却してはならぬことである。この言葉の調子が正確であり、自由自在に出来ること云ふことは、即ち上手と下手との分れる處であつて、言葉を換へて申せば、多数の聴衆に向つて、その意見を發表するにしても、唯だ單に其の説明に過ぎない、人の耳に入れば即ち足ると云ふことになるか、又は眞に其の人の思ふが儘に聴衆の心を左右するか、即ち人を動かすかどうかと云ふことになるのである。私の述べて来た以上のことは、素より未だ充分に盡してをるとは云はない。が、少くとも以上の用意が遺憾なく出来たならば、私は理想に近い辯舌を得るに困難でないと思ふものである。こゝに完全なる用意が——其の音聲と云ふことに就いてだけは——出来たと云つても、差支ないと考へるのである。

四

回パーカーの研究 私述の述べ来た處は辯舌道に對して、最も完全なる用意であるやうに申した。が、こゝに最も適切なる一個の實例として、ジョセフ・パーカー氏の辯説練習のことを話して見よう。このパーカー氏は米國の演説社會に於ける有名な説教者であり、大演説家である。氏が或時一週間に二回宛三週間續けて、數萬の人に演説して非常なる成功をせられた時に、或人が、
 貴下は如何にしてあれ丈けの成功を收められたか。如何にして
 貴下は演舌の練習をせられたのであるか。
 と問ふたことがある。その時にパーカー氏の答へたのは、實に下の如きものであつたと云ふ。

(100)

私は毎朝夙に床を離れて、先づ第一に前の小山にかけ登る。而して朝露を踏み、清い涼しい朝風を思ふ儘に呼吸し、胸を出来る丈けふくらしして呼吸をすることをす。それから山を馳せ下つて海水に飛込んで海水浴をし、こゝで鹽風を呼吸して、海水を出ると直ちに海岸を奔ることをす。脚力の續く限り、息の出来る間は、全力を傾けて馳けるのである。その結果は、自分ながら毎朝私は私の肺臓の緊脹するの覺えた。

私はこれからして私の呼吸の非常に強くなつたことを知つた。私は如何なる堅い板でも、我が息は能く吹き破ることが出来るやうに思ふ。若し私の演説が成功したと云ふならば、その成功の原因は何れにあるかと云へば、確かに私が以上の如き練習をやつた結果に外ならぬと思ふ。

(101)

五

これに依つて之れを見れば、私の主張し、力説せんとする處は、決して誤りでないことが分るであらう。こゝに於いて繰返して云ふ辯舌の根本は咽喉の使用でなく、肺臓の活動に依つて生ずる呼吸から來るものである。それ故に呼吸の充實と云ふことは、決して忘れてならぬ、肺臓の活動が充分であると云ふこと即ち呼吸の強いと云ふことが何人にも必要である。而して之れは改めて云ふ迄もなくその取扱ひ方に依つて、誰にも充分に練習の出來ることであるからして、苟くも演説、講話と云ふやうな辯舌道に志す者は、こゝに心せねばならぬ。パーカー氏の苦心を思はねばならぬ。私は切に此の呼吸の取扱ひ方と云ふことに氣を付けて貰ひたいのである。

回根本を忘れるな　かう云ふやうに私共は——辯舌道に志すものに
 取つて、かの咽喉の使用が根本義でなく、枝葉の問題であつて、第
 一義となるべきものは、實に呼吸であること云ふことを知つた。かの
 咽喉は道具に過ぎないものであると共に、咽喉の使用と云ふことは
 呼吸其のものでないと云ふことをも知つた。若し咽喉の使用と云ふ
 ことに許り重きを置いて、かの根本義たる呼吸の取扱ひ方に、毫も
 注意しなかつたならば、それは實に財布の美しいと云ふことに許り
 重きを置いて、その中の金と云ふものを思はない馬鹿氣たものと同
 じことであつて、實につまらぬことである、無價値なものである、
 取るに足らぬものであるのである。

それから聲の強弱と云ふことは、その呼吸の壓力の強弱に比例す
 るものである。肺臓の活動如何に依つて、強くもなれば、又弱くも

なるのである。が、如何に肺臓の活動が旺盛であり、呼吸の分量が
 充分であつても、聲の取扱ひ方と云ふことに注意することもせず、
 練習と云ふこともしなかつたならば、矢張り財布許り心にして、そ
 の中身と云ふことには、何等の心もせぬ馬鹿者で、その辯舌には三
 文の價値もないものだといつても、決して差支はない。かくの如き
 ことは、眞につまらぬものである。人を感動せしむるなど云ふこと
 は、絶對的に望むことが出来ないものである。

これを要するに、根本義は咽喉にあるのでなく、かの咽喉の使用
 と云ふことは、抑も末の末なるものであつて、その根本義は、肺臓
 の活動に依つて生ずる呼吸である。この呼吸と云ふことは、決して
 私共の忘れてはならぬことであると同時に、又其の取扱ひ方と云ふ
 ことにも、こゝに深甚の注意を怠つてはならぬ。私は此の根本義た

るべき呼吸に、少しも注意するものゝないのを遺憾とすると共に、世の中の辯舌道に志すものにして、この根本義を忘れることのないやうに切望したい。不斷に「根本は何れにありや」と云ふことを閑却しないやうに、こゝに私は注意して置きたいのである。

邪魔な手足か

回 態度は如何する。私共は能く「演説するにどの程度まで態度を用いて好いか分らぬ」との歎聲を聞く。が、態度を餘り使用し過ぎて滑稽に陥ることがあり、さればと申して、態度が不充分であつたならば、あたら名演説も効果がないことになるのである。この態度に就いては、餘程辯舌道に入らうとする士の苦心を費す處である。が、私は特に日本人が演壇に立つた時の態度が——どうも異様に感ぜられてならぬ。先づ演壇に立つて「諸君」と云ふか云はぬ中に、如何にも手足が邪魔になつて仕方がないと云ふ鹽梅である。

それ故に、多くの人は直ぐ兩手を後にやる。而して後にやつた兩手を又一寸もじつとさしてゐない。その様子を後から見ても、可笑しいやら氣の毒やら——同情に堪へぬのである。又或人は必ず右の手で腰を支へる。この實例は青年諸子が先輩などを訪問した時の態度である。主客相對した時に、青年諸子は臂を張つて、右の手を胴の邊で支へて、如何にも傲慢な態度で應接する。併し此の態度は、決して自らしやうとしてではない。意味があるのでない。唯だ手のやり場所がないからである。又人と對話する時に、手を組んだり、ひねつたり、一寸もじつとさしてゐないものもある。是等の人達の態度は、丁度「兩手は如何にすべきか」と問ひながら、どうも解決がつかぬと云ふやうであり、又實際に兩手の置所が分らぬ爲に困つてゐるやうである。

唯だ單に手のみでなく、更に足に對しても、その處置に甚だ困難してゐる。兩手が邪魔になると同じやうに、この足も邪魔になることは、誰しも氣の付いてゐることであつて、多くの人達が能く「前に演臺がないと話し悪い」と云つてゐるのでも分る。何故に腰部から足の爪尖まで聴衆に見られるのが厭であるか。演臺があれば辯士の身體の殆んど半分は保護せられることになる、換言すれば、半分丈だけは處分がついたやうに安心が出来るからである。斯くの如く、手足を邪魔にしてゐる人達が「なアに態度に注意する必要は毫もない。態度は末であつて、辯舌の生命、その根本義は精神である」と云ふ。素より「辯舌は第二の自分を作らむとする精神作業なり」で、その根本義は精神であつて、態度は末であるといふことも或は出来るであらう。が、その「態度は末にして、精神が本なり」と主

張する人達の動機は何であるかと云へば、充分に態度と云ふことを知らずして、態度と云へば、直ちに「手足が邪魔になるからである」と云ふやうな消極的な考へからではないかと疑はざるを得ない。否、それが非常に多いと私は思ふのである。

この態度は未で、精神が本であると云ふことは、何れの時代に於いても、素より眞理である。併し何故に人間が神から授かつた四肢を能く使用しないのであるか。四肢を使用することは知らぬでもない」と云ふのは、確かに間違ひの議論であると申さねばならぬ。而して手足は能く働くものである。何故に此の能く働くものを充分に使用することを考へないか。かの手足を邪魔にしてをる人達は、實を云へば自體全部をも邪魔にせねばならぬことになる。而して結局は聲と精神さへあれば、それで充分に演説の能事を盡し得ると思ふて

をるのであらう。自體の存在が邪魔になるやうになつては、實に何とも云ひやうがないのである。

二

回無言の雄辯とは 精神上の仕事にせよ、或は肉體上の仕事もせよ、手足の大切なることは、こゝに云ふ迄もない。それを邪魔にするなど云ふことは、私共に取つて、その理由が解らぬ。それ許りでなく、四肢の使用と云ふことを知らずして、唯だ邪魔にばかり考へる人達は、態度に就いて云々する資格がないものだと思ふ。愆る人達が演説會場に臨んで、演壇に立つた時には、第一に躓くものが態度である。平生は不必要だと主張してゐたもので、第一に失敗する。こゝに於いて「如何に態度を使用すべきか」と云ふよりは、如何に

して之れを避けやうかと考へる人が多くなるやうである。が、これは實に誤れるの甚だしいものであると信ずるのである。

愈々私共は深く態度と云ふことに就いて考へねばならぬ。が、先づ成可く——いや出来る丈け之れを避けるやうにすべきものだ云ふ説を正當なるものであり、當然なるものとして、態度の使用は避けるものとし、手足は使用せぬものとする。而してそれで人間は少しも態度を使はぬかと反問すれば、私は例を以つて示すであらう。

こゝにAと云ふ名士がある。Aは法學博士、文學博士で、才學一世に並ぶものなく、その風采も堂々として、人格も亦完美せる紳士であり、且つ其の辯舌は滔々として流るゝが如く、頗る美音であると云ふ——何一つ非難すべきものがない。そのA博士が或公會の席上で「人格と品位」と云ふ演説をされることになつたとする。聴衆は立雖

の餘地なき迄に入場して、Aの演説を今かくと待ち受けてをる。

て懸「A氏を御紹介申上げます」と云ふ聲と共に、司會者に導かれてAは廊下より演臺の方に進まれる。而してAは、先づ入口の處で鼻をかむ、その時に鼻汁の一滴が美しい鬚にくつついてをることを知らずに、愈々進んで演臺に登らうとする時に、何か躓いてひよろ／＼游いで、漸くひつくり返ることはしなかつた——そのA氏が堂々と「人格と品位」に就いて説いた處で、果して聴衆は最初に期待したやうに感服するであらうか。

更にBと云ふがあつて、演臺に立ち、數分間は何物も語らず、聴衆を見下してをるに拘らず、猶ほ聴衆が「あゝつ」と何か知ら胸底に深く印象を刻まれたと假定する。

今此のA及びBに就いて見るに、Aは如何にも鼻汁から壇場を游

ぐ迄に十二分に念入りの態度をせられた。が、その聴衆を感動せしむるに至つては、十分のものが或者には八分、或者には六分、而して或者に對しては、殆んど「何の事だ！」位にしか感ぜしめないといふ結果を來たしたるに拘らず、Bは無言裡に聴衆を先づ感動せしめたのである。然り、而してBは、殆んど——否な、全く態度を使用しなかつたと思ふものもあるか知れぬ。如何にもBは手足を使用しなかつたのである。が、その態度を使はずに話したのであると思つたならば、それは大間違ひである。無言裡に態度を崩さず、違つた態度で話したのである。無言の雄辯である。それ故に明白に態度を使用したものがいゝとか悪いとか、明白に態度を使用せぬのが上手だとか、下手であるとか云ふ譯のものではない。俱に態度に於いては變る處がないのである。

唯だ△は話さざる前に、その演説を價値の十分あつたものを八分とし、更に六分として、拙くしたのであつて、Bは語らざるに、先づ聴衆を感動せしめたといふので、この兩者の間に充分なる注意を拂ひ、研究をすると云ふことが私共に取つて、最も大切であると思ふのである。

三

回頭から爪尖まで　かく態度は、唯だ手を動かさし、足を踏付けるといふやうな簡單なる問題ではない。唯だ四肢の使用のみではないその根本義は頭の先きから足の爪尖まで、即ち人の眼に觸れる身體のすべての部分によつて表はされる動作である。演説中の動作は聽てすべて態度であるといふことが出来る。されば若し態度がいやだ、

嫌ひだと云へば、壁を隔て、演説するか、或は幕の中から演述するより外に仕方はない。さう云ふことになれば、もう辯論の必要はなくなるので、寧ろ演説の筆記を讀むか、又は蓄音機に依る方が結構であらう。

この事を具體的に説明すべく、更に例を擧げるならば、かの西郷南洲翁が藤田東湖であつたか、又は雲井龍雄であつたかよく覺えぬが、常に會見したい／＼と云つてをつた。然るに幸にして一日京都の木屋町の某旗亭で兩人は會見した。平生から會ひたい、會つて見たいと云つてをつたことであるからして、兩人の門弟共は、今日こそ二人者の間に談論風發するであらうと窺に期待してをつた。が、兩人の會見は、優に二時間に涉つたにも拘らず、唯だ一言も發しなかつた。一人は日あたりの好い障子の處で羽織の紐をひねくつてを

り、一人は板の間を見詰めた儘であつた。門弟共は呆氣に取られたのである。併し兩人は相分れて後に、如何にも心地よげに「あゝ今日のやうに愉快な日はなかつた」と語つたと云ふことである。彼等は此の時に、素より聲では話をしなかつた。所謂無言裡に語つたのである。即ち身體で話したに相違ない。換言すれば、頭先から足の爪尖で話したのである。更に兩人は眼で話したに違ひない、即ち眼と眼とで話したのである。

それでは演説をする時に身體全部が雄辯で、辯論は必須なる部分の責任をとるものであるならば、手足を使ふことを避けやうとするよりは、如何にして身體全部を使用すべきかを考ふべきではあるまいか。私は辯舌道に熱心なる人達と共に、これを深く研究したいと思ふのである。

四

回 必要なる準備は、そこで私共に最も必要なる準備としては、先づ自分の首、自分の胴、自分の手、自分の足、これが部分的に自由自在に使へるか、これが總括的に自分の思ふやうに自由自在に使へるか、と云ふことを考へて見ねばならぬと思ふ。然り、而して以上述べたことを實際にやつて見るならば、唯だ單に自分の首丈の使用さへも、猶ほ充分に出來ぬと云ふことを發見するであらう。私の實際に就いて申せば、兵役に従事した時のことで、陸軍で新兵に最初に教へるものは敬禮である。敬禮は受禮者の三步前迄は普通に歩行して、三步前で眞庇に手を掛け、首と視線とを受禮者の眼に注いで進み行くのである。私の中隊で中等教育を受けてをるものは、私と

も一人あつて、唯だ二人であつた。が、私は元より敬禮位は出來る中學校では毎日やつて來たことであり、これ位は何でもないと思つてをつた。勿論、自分の身體は自分の儘になるものと信じてをつたが、それを實際にやつて、私は自分の身體でありながら自分の意の儘にはならぬものあることに甚だ驚いたのである。唯だ容易なる敬禮位が——と思つてゐた其の敬禮が受禮者が來ると思ふと自然に手が振れてゐないことに氣が付く。右の足を踏出し、た時に、右の手が伴はない、固くなるのである。而してそこに一種無形の束縛があるやうで、敬禮しやうとすれば、右の脇腹が手にくつついて上るのではないかと考へられた。更に進んで「右向け右！」「左向け左！」と命令せられた時に、私は中隊中でも、他の教育のないものと比較せられるやうな行動は取らぬと思ふて、「右向け右！」と

命ぜられた時に左に向くものを笑つてをつた。然るに他を笑つてをつた自分が十回に一度位は、必ず「左向け左！」に右に向くことがあつた。その時でも自分は元より左に向く考へである。が、身體が随つてゐないことを發見する。これと同じやうに、初心の辯士などが自分の演説中は、殆んど夢中で、後になつて「あの處がいけなかつた」と氣が付くやうなものである。

そこで自分の身體を自分の意の儘に使ふと云ふことは、決して習練なしには出来るものでないことを覺るであらう。これに今日まで氣の付かないのは、極く緊要な時機に實驗がないので、多くの人は意識しないのである。が、實に自分の身體であつて、猶ほ自分の思ふ儘には行かないのである。又自分のしやうとしてをること、常に身體が矛盾した動作をしてをるのに氣の付くこともある。これは

少しく自分の身體を使ひ、實驗したものには、最も能く分ることであらう。こゝに於いて先づ手足を如何にすべきかの前に、自分の身體を如何にして使ふべきかを考へるのが私共に必要なる準備であると思ふのである。

五

□ワーマンの注意 この態度に關する注意に就いて、私の今日迄に蒐集し得た處の書物の中で、教授ワーマン氏の注意が一等好いものだと思つてをる。氏の所論は——今日は亡くなられた。が、現代の表情術のオウソリチーと云はれた——デザルト氏の説を祖述してをるやうである。が、ワーマン教授は、先づ態度に就いて、手首の運動から始めさせてをる。この手首の關節が右のやうに左が動き、

左のやうに右が動くか、而して其の動き方が自分の思ふやうな程度に動き、意のやうな位置に動くかと云ふことから次いで、臂の關節のこのこと、肩の關節のこのこと、肩と腰との連關たること、頭の運動、足の運動と云ふやうに、順序に説いて行つてをるのである。

この様式の善悪は未だ私は實驗せぬから分らない。が、態度に就いて根本的に出来てゐないと云ふことを私は著しく實驗する。その結果は自分の首が自分の思ふやうになつてゐなかつた時に「成程」と思ひあたるのである。又「右から人が来た」と云ふ時に、右の方に注意し、眼も亦適切に行く。が、更に「左から人が来た」と云ふ時は、右の時と同一の角度で向いてゐないと云ふことが分る。視線も亦右に向いた角度と同一にはなつてゐない。こゝに於いて聴くもの、頭に起る感じと説明者の感じとは、違つたものである。若し思ふ如く身體

が使へ、四肢が使へたならば「左から来た人と右から来た人とがばつたり行き逢つた」と説明して、如何にも思はせることが出来るのである。併しそれが出来ない證據は「右から来る人と左から来る人とがばつたり逢つた」と云ふ丈け——唯だ説明者に思はれる丈け——であつて、見てをるものには、左の手の使へない結果は、左から来るのである。前から来るやうにしか見えないので「ばつたり逢つた」と云つた時に、如何にも可笑しく見える。それから一つ例を擧げるならば

「高い——高い——空から雪が降つて来た」と仰向いた時に、言葉より態度がよく出来たならば、聽いてをるものに、如何にも高い——高い——空と思はせることが出来る。が、その高い——と云つた時に頭がまはらぬ爲に、高い——と云つても二尺か三尺にしか見えないう云ふ事實に就いて實驗すれば、自分の思ふやうに行かぬことが

分るのである。

六

□態度の始りは？ この手足を使ふことは——態度としては、實に枝葉の問題に過ぎないので、先づ初心者は自分の身體をどの位に使へるものであるかと云ふことを考へねばならぬ。而して首、手足、胴などの動作が充分になつたならば、態度の始まりは何からであるかと云ふことを考へて見ねばならぬ。演壇上に立つて、始めて態度が始まるものであるか——私共が若し辯士として出演する時に、聴衆に自分の身體が映じた時は、既に態度の始まりである。廊下から演壇に進む間も、總て態度であると云ふことをくれぐれも忘れてはならぬ。演説中の態度は勿論のこと、この間の態度の立派なもので

あつたが爲に、聴衆に非常な感動を與へるものである。それ故に話さざる前に話したより拙い態度に出でないやうに氣を付けねばならぬのである。

併し前にも云つたやうに身體全部が自分の知らぬ間に勝手な働きをしてをるもので、之れに充分に氣を付けねばならぬ。その實驗は人形を立て、見ればよく分る。人形を立て、其の首を真直に差込めば、決して倒れない。が、之れを少しでも右又は左に傾ければ、直ちにばつたりと倒れる。こゝに人間が立つてをる、而して兩手を動かす、左に向き右に傾いても、所謂態度を換しても、決して倒れることはない。何故に人形のやうに人間も倒れないかと云へば、人形はまつすぐに差込んだ首の爲に重力の平均がとれてをるからして、首を動かせば倒れる。然るに人間には意識せぬけれど筋肉の動きが

平均をとつてをる。筋肉のつり方によつて、無意識に重力の平均がとれてをるのである。かう云ふやうに人間には知らない間に自分を動かすものがある。

その無意識の裡に自分を動かすものがあることを知ると共に、それを没することを稽古せねばならぬ。否らざれば思ふやうに自分の自體が使へるものではない。元の無意識的の動きを滅却させて、ここに初めて自分の身體を自分の意の儘に使へることになるので、言葉を変へて申せば、無我の境に入り、無心の三昧に入るのである。それ故に西洋に於ける俳優學校の生徒は、この練習をやつてをる。直立不動の姿勢で立つて、何事も考へないで、そしてがつくりと首を前に傾けると共に、俱に身體もばつたりと倒れるやうになれば、それで自由自在に態度の修練が出来てをると云ふのである。故に私

共は丁度歩いてをる人が電氣にでも觸れて倒れるやうに、突然枯木を倒すやうに、自分の思ふ儘に身體を使へるやうに習練せねばならぬのである。

その事柄は如何なるものであつても、その事柄が説明者の頭に明白に印象せられておなければ、聽者に何等の感動も與へない。つまらぬものとなつて仕舞ふ。かの芝居など見て、役者が如何に怒つたやうにしても、その人自身がその氣でなかつたならば、少しもうつらぬ、眞に迫ることは出来ない。怒れば、俱に見物人を怒らしめ、泣けば、俱に見物人を泣かしむると云ふのは、役者がその心になり自分と云ふものを没却して、その扮した人物の心になつたからである。態度はあらゆる境遇に於いて自分の力を没却して、初めて眞に迫るものとなるのである。この眞理を深く考へて、唯だ態度と云へ

ば、演説する時に手足をどうすれば好いか位の淺薄なる考へを持たず、苟くも辯舌道に志す私共は、こゝに十二分に研究を積まねばならぬのである。

時間と場所と

回選定の必要とは、かの音聲及び態度に次いで、先づ辯舌道に志すものにつけて、時間と場所との研究が順序であらうと思ふ。が、さて演者は、何事かを話さうとする前に、如何にして話すべきかを知らなければならぬ。而して之れより又前に、如何なる場所を選定すべきかと云ふことを考へなければならぬのである。この場所を選定すると云ふことは、唯だ演者の話すことを有効に聴かせると云ふ手段に過ぎない。が、これは非常に大切なることである。この場所の選定と云ふことは、決して私共の忽にすべきもの

でない。如何なる場所であるかを先づ話す前に知つて置くことは、確かに演者にとつて大切なることである。言葉を換へて申せば、演説者自身の方で其の話すことを有効に聴かせやうとする——演者には決して忘れてはならぬことである。果して然らば、この場所とは、如何なる範囲を指すのであらう。自分の立つべき位置はどうであるかと云ふに、或は公會堂なることもあらう、或は劇場なることもあらう、或は學校の教室なることもあらう。又は劇場を打抜いた處もあらう。或は料理屋の大廣間なることもあらう。而して或は西洋料理屋の二階なることもあらう。その話す場所の如何に拘らず、不斷に演者には二様の原因から知つてをらなければならぬ二様の準備があるのである。

それは演者の肉體上の準備、即ち肉體の各部分部分の準備であつ

て、他は即ち精神上の準備である。憚ることを云へば、或は怪しむものがあるであらう。そんなことをして場所の選定をする必要はない、如何なる場所であらうとも、その話すことさへ立派なるものであつたならば、即ち其の演者の人格が高く、思想が豊富であるならば、丁度眞珠は泥土の中にあつても、その貴さの變らないやうに、實質さへあればよい。實質がなかつたならば、その場所の如きは、如何に選定しても、遂に駄目であると云ふものもあるであらう併し其の影響は非常に違ふ。特に演者の話すこととは、話す目的の上から云へば、その二分の一の仕事に過ぎない。他の二分の一は聴かせることとなる。若し話すことが話す目的から見て、全體をエックスとすればエクオールの話すこと、エクオールの聴かせることとなるのである。

こゝに於いて何人にも徹底的に場所の選定の必要なることが明白になつたらうと思ふ。が、唯だ演者の話さうとすること丈けさつさと話して、我が成さんとすること終れりとするものがあるならば、それは大なる誤りである。論より證據である。かの午砲の如きものは、毎日十二時になれば、之れを聞くことになつてをる。が、之れは決して聴かせやうとはしてゐない、聞く人もあれば、聞かぬものもある。又現在話しをしてをるものでも、外に氣を取られて、相手は何を云つてをるか面と對つてをりながらも、猶ほ少しも分らぬことがあつて、之れを見ても、話すことが二分の一であつて、聴かせることが二分の一であると思ふことが最も善く解せられることと思ふのである。

二

回習慣より便宜へ　そこで此の話すと云ふことに肉體及び精神上の準備が在るやうに、聴かせることに就いても、その場所を知らなければならぬ。而して矢張り肉體及び精神上の二様の準備と必要とがある。何故かと云へば、こゝには場所に伴ふ習慣がある。その場所の與へる感觸がある。それ許りでなく、その場所が演者に與ふる便宜の等差がある。之等は演者にも、聴衆にも、確かに關係がある。即ち好い感じを與へる場所と悪い感じを起させる場所とがある。云ふのは、語らざる以前に、演者を區別し、制限し、或は割引すると同様に割増し、同情を起させる。之を私の實驗より云へば、同じ話しを小學校の講堂でした場合には、その學校を辭して去る際に、玄

關から門の邊に三々五々戯れてをる生徒が禮をする。それから途中で逢つても、猶ほ必ず敬意を表する。が、同じ生徒に對して、若し劇場で話しをしたならば、決して此の事は無い。私の辭し去るのを見て「今話したのはあの人の位のものである。」

然るに小學校で話すとは、その準備に見て、後者の方に苦心してをる。演壇の周圍に學校の職員を配列するとか、又こは教場と同じだと説明してをいて話しても、その結果は不用意の講堂で話したよりも、影響する處は多くない。而して小學校の生徒に「あの人」扱ひにせられるのである。之れを見ても、如何に場所の選定が必要であるか、その場所に依つて、どれだけ影響する處に差異あるか、分るであらう。然り、而して以上は、精神上的の各部分からして、その場所の選定を忽にしてならぬ、その場所の注意の材料に

なるであらうと思ふ。若し演者の話さうとすることが精神上的の風教道徳、修養と云ふことに關するものであるならば、少くとも其の話が訓意を寓するものであるならば、若しくは多少にても、その話したことを實行して貰ひたいと云ふならば、その話しに敬意を拂はしめ、演者に威嚴を保たしむる丈の場所、即ちその話す場所にある間は、聴衆に襟を正さしむるやうな場所を選定するの必要あるは、何人にもよく分ることだと思ふ。

この準備を缺いで、劇場も宜しい、寄席も宜しいとして話したならば、肉體上の覺悟から云へば、素より益することが少くないであらう。之等の建物は演説、又は講演する爲に建てられたものであるからして、或は音聲の反響とか、或は還氣の具合とか、或は聴衆の出入とか、或は演者の進退とか、その他に一として遺憾なるものは

ないと言つて好い。かく肉體上適當せるに拘らず、精神上の効果は全然ゼロであることを知らねばならぬのである。更にも一つ我が國で困ることがある。我が國の演者の劇場、又は寄席と云ふものに對して、特別なる顧慮を要することは、殆んど我が國には公會堂と云ふ適當なる場所がなかつた。随つて明かに公會の席であるべき劇場、又は寄席の如きものには、公會に伴ふべき儀式、禮節、道德と云ふものがない。唯だ單に「人寄せ場」と云ふ意味に於いて、町人も御座れ、百姓も御座れ、望むならば、武士も御座れと云ひたい。が、武士は丸腰でなければ這入れないと云ふ河原者の亂舞場が今日の演劇場となり、寄席と成上つたものであるからして其の結果は甚だしい不行儀、特別なる惡習慣が此の建物に限つて許されてをることが多い。さう云ふやうな事實は、如何に肉體上の満

足は多くあるにしても、精神上の効果はゼロで、話すことが話さるに勝ることが往々にしてあるのである。更に進んで——それならば、かの講堂、公會堂はどうであるかと云へば、精神上には場所そのものが偉大なる助力を演者に與へる。いろくの關係より見て、確かに演者には有利である。併し肉體上の覺悟、準備と云ふ點から見れば、今日の我が國の講堂及び公會堂或は教場と云ふものは、演者に非常なる苦痛を與へて、話す利益と云ふものは、提供されないやうに思はれる。かの大阪の公會堂の如きは、我が國の三大都市中にあつて、第一に建られたものであらうが、あれで話したものの一人として「失敗であつた」と云はぬものはない。その音聲を使ふ上から云へば、その不都合なること大阪の公會堂の如きものはない。何故かと云へば、演壇の高さの比例と會堂

の廣さの比例とが調和せぬと同時に、階上と階下の會衆の座席とよき比例を取つてない。釣合が取れてゐない。それだから聴衆には、如何にも演者がみすぼらしく見える。即ち語らざるに、先づ演者を割引せしむるの餘儀なきに至らしむるのである。

それから音聲の反響と云ふことに對する設備が不充分である。それ故に、如何に音聲の量は大きくても、抜けて仕舞ふからして、會衆の三分の二と云ふものは、遂に演者の正確なる音聲を耳にすることが出来ない。この外に今日演者の立つて話しをする學校の講堂、又は教場と云ふものは、唯だ之れに收容すべき人員に對して、この位の廣さはなくてはならぬ。この位の空氣を保たねばならぬとの注意はある。が、演者の爲には、之れと云ふ特殊の注意が拂はれてゐないのである。

憊る教場、又は講堂に豫期以上の人を詰めて、氣温の關係や、空氣の流通の具合からして、その兩方の窓を開放して仕舞つたと云ふやうな時には、演者に取つて、實に戶外で話すより以上の苦痛を感ずるものである。更に又或は講堂とか、或は教場とか云ふ如きものは、光線を充分に取ると云ふ關係上からして、四方をガラス窓にしてある結果は、演者が壇上に立つた時には、その背後に光線を負ふことになる。幸か不幸か、演壇の位置が太陽に面する方向となつた時には、演者の顔も衣服も黒くなつて仕舞ふのである。

回 黒装された演者 かくの如く、その演者の顔や衣服が黒くなるに反して、聴衆の顔は明るくなる。聴衆の顔が明るくなれば、明る

くなる丈けに、演者に取つては一々聴衆の點頭くのが明瞭に認められると云ふ利益はある。が、併し聴衆から立つてをる演者の顔が黒く見える場合には、その與へられる感じが三分の二、又は三分の一と云ふものは削減されると云ふ不利益がある。之れは學生諸子が夕暮に運動場、又は廣場に散歩にでも出られた時に、誰か一人夕暮に立つて話をする、而して多數のものが聞くと云ふ時に、しばく實験せられることと思ふ。聞くものには聞きやすい。が、話すものには苦しい。これと同じことで、演者には聴衆に知られぬ苦痛があるものである。

これに就いて面白い話がある。少し古いことである。が、私が臺灣にをつた頃に、當時の淡水税關長をしてをられた野村才三氏をニューヨーク・ヘラルド従軍記者であつたデビッドソン君と一所に訪

問したことがある。此の時、野村税關長の談話に「税關長など云ふ職を奉じてをるといふ、世間の渡り者だとか、五大洋を乗廻して、箸にも、棒にも掛らぬ——生死と云ふことさへ、つゆ程も眼中にならぬ剛情で、横著で、手に終へない無頼の船長だとか、或は船員などに接する場合が少くない。之等の船長、又は船員は、各港に寄つた場合には、必ず幾何かの商賣をしてをる。船の甲板に積んだ荷物の運賃は、船長又は船員の所得に歸すると云ふことになつてをるので彼等は之れを利用して、或時は密輸入をするとか、又はいろ／＼の理由を述べたて、税律を胡麻化さうとする。而して彼等は、何處までも黒を白にしやうと強辯する。又そのやり方が如何にも辛辣を極めたものであるからして、大抵のものであれば、負けて仕舞ふのである。が、私は怒るものと對談する時には、又非常なる覺悟がある

これは少し手強い奴だと思つた時、又は此奴とは長く話したくないと云ふやうな場合には、常に自分の位置を室の中央の居心地のよいやうにして、そして出来るだけ自分の顔を黒くする。カーテンの具合を換へるとか、自分にさす光線を避けるとか、努めて光線を負ふて相手に對する。それで相手の顔は成可く明るいやうにして、その椅子の如きも亦なる丈けせ、コマしい處に置く。頭の上で時計がコッコツやつてをる、少し手でも延ばさうものなら、用筆筒に觸れるその上にはいろ／＼のものがあつて、觸るれば危険であると云ふやうにしてをく。而して努めて強い光線をさすやうに仕向ける。こゝに於いて語らざるに、先づ吾には七分の利益がある、強味があるに反して、相手には七分の弱味がある。斯くの如くにして、最初は手強い、へこまされるかと思ふたものでも、五分五分には行く。又大抵

のものであれば、決して面倒なく、用件は解決するのである』と語られたのである。
 これは相手を肉體上及び精神上よりして、強辯し悪い位置に置き自身を有利なる位置に置くことで、その効果が斯くの如くなるのである。これは餘程有利なることで、又場所を選むと云ふ上に、非常に参考になることと思ふ。この野村氏の話でも、如何に演者の位置が大切なるものであるか、その場所の選定の必要が如何に大切であるかと云ふことが分るのである。

四

回 其の他の用意は、これを要するに、演者が話をする以前に、その話すべき場所を知ると云ふことは、話す前のことである。が、出

来るならば、話すべき場所を選定すると云ふことを考へなければならぬ。而して更に出来るならば、肉體及び精神上からして、演者は聴衆の呼吸を考へ、その場所に從つて、組立方、材料の選擇、又は話す言葉の調子と云ふものを考へなければならぬ。随つて場所は、大にしては斯くの如く、小にしては其の話す場所の一部分なる演壇の位置。風と光線とに關係する窓の開閉、演者の精神上に關係する位置演壇と出入口との關係と云ふやうなことに就いても亦詳細に注意を要する。更に些細なことを云へば、演者が登壇する出入口に就いても、大に注意をせねばならぬ。以上は實に簡単に場所に就いて述べた迄である。かの場所に對する意見の梗概に過ぎない。詳細に各部分部分の説明をすれば長くなるであらう。が、これ位で大方は了解せられることと思ふのである。

聽かする用意

—

回二種の準備作業 この話すこと、聽かせることとは、例へば車の兩輪の如きものである。相持ち、相助けて「話し方」の目的を達せしむべきものであることは、こゝに改めて説明するまでもあるまいと思ふ。併し研究の順序として、先づ何れより始むべきかと云ふことになれば、「話し方」は實行の部分に屬することが多く、聽かせる方は準備の部分に關することが多いのである。素より「話し方」にも準備作業が最も大切なるものであることは、勿論のことである。が、便宜として聽かせる心構への方を會得してをくと「話し方」に關する

用意の大部分は、いろ／＼の點で好暗示を與へられることゝなるのである。この聽かせる心構へとして、第一に考へねばならぬことは聽く者が聽く爲に使ふ道具の種類でなければならぬ。それと同時にその持つてをる性質をきはめることである。先づ研究は此の道具調べから始めることにする。聞くと云ふことに使ふ第一の道具は、何であるかと云へば、無論、耳である。然り、而して耳には二種あることを知らねばならぬ。即ちさくらげ耳と心の耳！その在處で云へば、外面の耳と内面の耳。これを説明的に云へば、鼓膜と理解力とでも云ふべきものである。くれ／＼も此の二種の耳があることを忘れてはならぬ。如何に話すものが汗を絞り、且つ絶叫しても、聽く者の鼓膜に故障があつては、駄目である。到底何等の印象をも與へるものではない。それと同様に、頭腦の働きに足らぬ處があつて

は、如何なる名論卓説も徹底するものでない。それ故に聽かせる心構への第一に、先づ満足な状態であることを希はなければならぬものは、この二種の耳の健全であることである。然るにこれが最も大切なる先決問題であるに拘らず、その第一關門には此方は一指をだに著けることが出来ない。「貴方の耳は外形が甚だまづい。が、鼓膜のお調子は如何で御座いますか」と聞くわけにも參らずと云ふやうなものである。假りに一步を踏込んで「お見受け申した處では、大分に耳垢が溜つてゐらつしやるやうです。が、お掃除なさつて、お出でになつたならば、猶ほ一層よくお聞きになることが出来ませう」と注意することが出来たとしても、その人が「大きなお世話様だ！これで話はようつく聞えるよ」と云へば、それ迄である。例へば耳垢も溜らず、鼓膜も健全な状態にあつても、その内

面の心耳まで立入つて「お前さんは此方の話が解るやうに頭の中によ
うつく仕度が出来てゐますか」とは、無論、問はれもせねば、聞いた
とて分りもせぬ。聴く、聴かせるると云ふ問題に、何より先づ考へね
ばならぬ一の道具でありながら、これ許りは絶対に此方がたづさは
ることの出来ない問題である。

二

回 会場選定の必要 さて關係はることの出来る問題に出来べき限
りの力を注いで、せめて此の方の満足を以つて、他の方の不足を補
はねばならぬ。その關係はることの出来る問題として、聴かんが爲
に聴く人が使用する第二の道具は、何であるかと云へば、聴く爲に
選定された会場であらう。会場となると聴く方にも聴かせる方にも

注文が出せる、謂はゞ共用の道具である。聴く側から云へば、聴く
爲に使ふ道具で、話す方から云へば、聴かせる爲の道具である。然
るに聴かせる爲の道具としては、聲を使ひ、身體を使ひ、更に進ん
では道具建を使ふと云ふことを知つてをるものにして、今日まで會
場全體を使ふと云ふことに氣の付く人が少いのは、實に不思議であ
ると申さねばならぬのである。

会場全體と云ふ問題に就いて、今これを反對の側から説明して見
よう。私共の實驗する處に依れば、小學校の講堂で講演した時と劇
場で講演した時との成績に見るに、同じく小學校の生徒であり、同
じき筋の物語であるにも拘らず、劇場で話した後に木戸口を出ると
今しも散じ行ふとする子供等は演者の後姿を指しながら「彼の人だよ
今も話したのは彼の人だよ」と。續つて學校の講堂で話をすまして

校門を出やうとすると俣の左右の子供等は皆脱帽して叮嚀に目禮するのが常であると云ふことは、既に申した處である。が、演者は同じ精神と同じ話を假令會場は二種でも、一つ心で語つたのに、その聴かせ得た結果は、かほど迄の相違がある。脱帽して敬意を表せしむる聴かせ方と、指して「あの人だよ」と噂さるゝ聴かせ方とは、何れが望ましく、何れが成功であると思ふか。こゝで何人も合點が行くことであらう。聴かせ方の第一準備として、その會場を選択するならば、その目的に副ふやうに、先づ會場の有つてをる性質、それに伴ふ習慣、それに附隨する考や、動作等の諸點をよくよく考量して、その上で決定せねばならぬのである。

今日までにも亦將來にも、多數の人を集めて聴聞させることの出来る處は、學校、寺院、劇場の三個所で、縣會議事堂、公會堂滅多

に無し、神社の社務所なども、稀に使用される。地方に依ると料理屋の大廣間が公會堂の性質を兼ねさせられて、人數と集會の性質に依つて、さう云ふ處に持ち込まれることも、決して少くないのである。以上のそれ／＼を會場として、諸君がその中に立つとして考へて見ると、諸君は始めて「話し方」の覺悟にも、いろ／＼の方面に應ずる聴かせ方を考へてをらぬならば、決して一本調子では、この各種の建物には應ずることが出来ないことを合點されるであらう。

同じ學校内にしても、講堂と雨天體操場とは違ふ。また假令同じ容積を有つとしても、講堂と教室とをつらねたものは違ふ。その様に、西洋式の縣會議事堂の——殊に階下の議員席と階上の傍聽席との距離を勉めて引放して、廣さに對して法外な高さを有する會場と料理屋の大廣間の如き、如何に高くするも、天井は一丈二尺を超え

ず、中心となるべき床の間は側位について間多、柱多く、唯だ徒に廣さを有つ會場とは、無論、覺悟が違はねばならぬ。併し是等の相違を一々に擧げてをると際限が無いので、こゝに是等の何れの會場にも、共通な三四の注意すべき要點を引抜いて、これに對する研究の著手を求めたいと思ふのである。

三

回講讀者に敵とは、その數多い會場に於ける共通なるものを擧げるならば、先づ次の如きものであらう。

- (一) 空氣、(二) 光線、(三) 溫度、(四) 廣狹、(五) 形狀。

先づ第一の空氣から説明して見よう。空氣に就いて、最も私共の氣を付けなければならぬ要點は、清濁と移動の二點である。場内の

空氣が汚れてゐないか。濁つてゐないか。例へば後の會合に間に合はせんが爲に、前の會合をかつぐに切上げ、その閉會と開會の間の五六分の差を利用して、會場内の掃除を爲したと假定する。かくの如き急激なる掃除と、その後を受けたる會場の汚れない、濁らぬ空氣を望むことが出来るか如何か。又會場の掃除は早く片付けてをつても、入口には開場を待兼ねてをる山なす群衆がある。その聽衆を時間に迫つて、一時に混入せしめたと假定する。群衆は吾勝ちと好い席を占有せんが爲に、或は履物を手にするものがある、或は土間を踏んで潜り込んだものがある、或は走るも早く、踏むにも荒い聽衆が漸く開演前に落著いたとする。恚る會場の空氣にして、果して汚れず、濁らないものがあらうか。或は講堂内に集めた生徒の座席に著いたものを賓客臨場の爲に、

一喝の號令下に起立せしめ、また直ちに坐せしむるが如き、或は中間休憩に不覺悟なる命令を突發して、平軍を騒がした富士川の水禽のやうに、ばつと散らしめて、座席と秩序とを構はざるが如き、急激動作の後を受けたる講堂の汚れざる空氣、濁らざる空氣を求むること可能なりや如何である。恐らく不愉快と云ふものも、この混濁せる空氣の中に、直ちにお話を願はれた程、私共に取つて不快なことはあるまい。これが經驗の浅い間は、何の爲にかやうに不愉快に、又不思議に咽喉を刺戟されて、ともすれば咳をするのか一向に解らぬ。が、漸く場敷を重ねて來ると共に、既に場内に入つた丈で、その開いた光線の陰に、あの塵埃の渦立つてをるのが目に見えるやうに感ぜられる。こんな處でも話なればこそ兎にも角にも片付けられる。が、獨唱などの如きものであつては、到底續けられる

ものではなからう。話にしても高い急速な聲の調子を使ふことの多い性質のものは、短い時間ならばいざ知らず、長時間の演述は、思ひもよらぬことであつて、感興の半以上は削られてしまう。約り艶がつけられぬ、滋味が認められない。演者に此の不満足を與へるに止まらず、聴者に知らず、識らずの間に疲勞を與へさせ、倦怠を感ぜしめ、甚だしきは頭痛や、眩暈を起させる處の恐るべき敵であると云ふことを記憶せねばならぬのである。

四

□空氣の移動如何 さて次は空氣の移動に就いての問題である。が、これは物に觸れて形に認められるもので、清濁よりして考へる

ならば、大に解し易いことであると思ふ。空氣の移動と云ふのは、つまり風で、話す者が聴く人に傳へる道具が呼吸に依る丈に、この問題は細密に、而して慎重なる研究を積まなければならぬものである。聲に注意する人が無い丈に、この会場内の空氣の移動などと云ふ問題には、皆無頭がないと云つてもよろしい、研究をしてる

ないと斷言しても差支はないと思ふのである。こゝに私共の頗る怪訝に堪へないことは、換氣、採光等を建築條件の重大なる注意事項として、入釜しく騒ぎ廻る學校の連中までも事實に於いては、一向換氣の實行に迂濶で、建てる時の條件さへ満足に備はつてをれば、その後はどうであらうと吾不關焉主義にやつてをるのではないかと疑はれる。私は多くの實見に依つて、かく結論し得るのである。が、今日まで何れの地で實驗しても、殆んど風

と云ふ點に注意して、窓、戸障子、さては臨時の設計物に、開閉の度、流通遮斷の加減を加へられたものを見ることがない。學校等では、殊に甚だしく、無意味にして、極端なる採光と極端なる換氣の爲に、演者の希望に反する空氣の移動は、東西南北、自由自在で、その結果は聴者に不規則、不整ひなる音聲の斷續と、随つて觀念の連絡を缺かしめらるゝ不愉快が倦怠となり、疲勞となり、不満足となり、聴きて聴かしめざるに勝る惡感を招かしめるやうなことになるのである。

これを要するに、会場内は、假令盛夏の候であるにしても、身に感ずるが如き空氣の移動は、斷乎として避くるを原則としたいものである。特に向ひ風の如きは、全然遮斷せなければならぬ。學校の教室を二三打抜いて設けられたる細長い臨時講堂の如きでは、向ひ

風を受る氣遣は毫もない。が、ともすれば横風を演壇に受けることが少くない。それでなくとも、この種の講演場は幅の割合に長さの比例が甚だしいので、精神上の統括も困難である上に、演述の側面から聲の波動を横さまに吹き散らされては、到底筋路すら合點させることが出来ぬのである。早い話が満月の如く引絞つた弓の覗ふ日當の胃の星と——よく引いて、兵と放つた矢がうなりを立て、風を切つて、真一文字に飛ぶ時に、横から不意に大長刀で、ばらりと拂はれたと考へて見るならば、この意味はよく合點が行くことであらうと思ふのである。これが爲朝のやうな弓勢ならば知らぬこと、先づ普通の弓勢ならば、敵をして怖れしめるよりも、寧ろ附甲斐なき骨折を喰はしめる種とこそならう。かうなつては的がある丈けに敵を正面に控へてをる丈けに、却つて射ぬにも優るの耻を見るので

この耻辱と苦痛とを常に極端まで経験させられる寄席の落語家は自然の傾向として、唯だ箴にある丈けの矢を盡せばよしと、力も籠めず、覗ひも定めず、なる丈け敵を正面に認めず、手當り次第に弦より放して、出来る丈け無意義に座を下るやうにしてをる。が、これは目的なき口演者なればこそ出来ることで、如何に其の場に處する進退の巧妙に、調子の輕快に、聲の使用の器用ならんとも、決して私共が模すべきものではない。その技巧は稱すべきであるかも知れぬ。が、斷じて私共の則るべきものではないのである。話が少し横道に入つた。が、右様の次第であるからして、演者が唯一の武器とする聲の保護は、その根元とも云ふべきものであらう呼吸の自由ならんこと、その呼吸の波動範圍の空氣の移動に、最も深甚なる注意をまとめねばならぬ。さればと云つて、全部會場内を

閉鎖して、微塵も風の動かぬやうにすることは、遂に出來ない相談である。殊に夏向きとか、多人數集合するとか云ふやうな場所などには、聴衆をして快く聽かせると云ふ立場から考へても、適當なる換氣と通風は考へねばならぬ。が、いろ／＼是等の點を考量して、話す者は自己が立つてをる位置を中心として、左右三十度乃至四十五度の角度以内は、空氣の自由移動から完全に保護されるやうに努めるならば、必ず實演の際に「なる程」と合點することが多いことであらうと思ふのである。

猶ほ空氣の移動を防ぐと云ふ意味から云ふ時は、その側面が幕であるとか、或は背面が葎張りであるとか、更に戶外に設けた假設場の床板も荒く、又は天井も有るか無きかと云ふやうなものは、努めて避けねばならぬ。以上に擧げたやうな設備は、却つて全部無設

備の露天にも劣るもので、不意に上より突き下す風、床下から捲き上る風、又は葎張りの間から之等をばさつかせながら侵入する風は、平調に吹く露天の風と違つて、甚だしく不規則に聲の部分を盗み去るものである。

それで全く戶外ならば、背後に高く茂つた樹木か石碑、又は盛土でも宜しい、何か障壁となるものを索めるが得策である。若し出來得るならば、會衆の背後即ち演者が正面の位置に同じく、樹木、土塀、又は土藏などの如きものがあれば、猶ほ結構である。不幸にして一切から云ふやうな物のない場合には、氣流の縦横を覺悟して、會場の中央に立つが最も困難なるが如くに思はれて、その實際に於いては、最も無難なる戶外空氣の活用方法であらうと私は信じてをるのである。

五

呼吸の保護法は私に嘗て九州東海岸地方の盆踊りを見たことがある。踊り場は多く宮又は寺の廣庭で、踊り子が廣く、圓く輪をつくつて踊るのは、何れも同じ風習であらうと思ふ。が、さて此の踊の輪の中心に、一段高く臺を置いて、その上に立つてをるのが此の踊りの音頭取りで、左の手には、白湯を入れた茶碗をさげ、それで折々咽喉をうるほすのに、少しも不思議はない。が、右の手に捧げたものが頗る私の好奇心を促したのである。否な、總ての外來者には珍らしく見えると思ふ。これが私の戶外演説に大に得る處であつた——大々的發見とでも名乗るべきもので、今日に至る迄も、猶ほ戶外に聽衆の前に立つ毎に、この音頭取りが右の手に捧げたも

のに感謝の念を禁ずることが出來ないと。かう云ふやうに勿體をつけて云ふにも當らぬ。が、その物が頗る意外なるもので、若し私がそれを申したならば、何人も恐らく「何んだ！ そんなものか」と意外に呆れることであらう。

こゝに私の大發見と云ふのは、他でもない、唯だ一本の番傘に過ぎないのである、それも至つて粗末なる番傘であるを云ふことを告白してをきたい。それを音頭取りが右手に捧げ、左手には白湯を入れた大茶碗を抱へて、而して四五尺高い臺の上に立つた姿を想像して見るとする。その足元には鎮守宮から擔いで來たと思はれる大きな太鼓を据えて、それを片肌ぬぎの若い衆が叩いてをるのである。うつかりすると全體の組合せが頗る面白く出來上つてをるので、その一部分の番傘などは、或は注意の視線から外れるかも知れぬ。勿

論、これが視線から外れても構はない。が、この傘の下から出る聲の調子を聞き外してはいけない！ この傘とその聲の調子の関係とを聞き外してはならぬのである。

最初に私は此の傘を見た時、一寸夜露よけかとも思つた。が、暫く立して聴いてをる間に、これこそ戶外の氣流縦横なる間に立つて、調子を崩さず、呼吸を散らすことなく、二時間又は三時間の長い「くどき」謠を樂に唄ひ續けることの出来る秘法であると合點するに至つたのである。それで村の若衆に「何時頃から番傘をさすやうになつたか」と尋ねて見た。が、併し「何時頃からですか……」と知りもしない、又彼等はこの傘に氣も止めない。それなら何故にさすかと聞いて見ると「さすと調子がとれます。が、さゝぬと聲がすづつぶれます」と云ふ。所謂實驗から得來つた呼吸保護法で、この中から分析

すれば、音聲の波及に關する原理や、その反響作用の複雑なる知識迄が含まれてをるのである。が、そんな小面倒な理窟は、一切番傘の骨の中に疊み込まれて、使ひながらも、知らず、唄ひながらも、知らず、かくて幾十年を傳へられたのやら、或は幾百年を傳へられたのやら。これを見ても亦必要に迫られた實驗上の知識ほど恐ろしいものはないと泌々思つたやうなわけである。

何も物は經驗である、諸君にして若し戶外に立つて演説でもする場合があつたならば、この番傘を利用して見たらいいだらう。番傘で不體裁と思ふならば、洋傘でも構はない。が、布張りの傘であるならば、なる丈けシャンと張つたものが宜しい。聲の爲に上を塞ぐと云ふことは、横を遮断するよりも、一層必要なる事であり、上を塞ぐ道具としては、恐らく傘ほど輕便なるものはあるまいと思ふの

である。
 聲を商賣にしてをるもので、大きな建物の中に試す場合に、先づ考へることは「聲が上にぬけるか」と云ふことである。聴衆の上の天井は如何程に高くても、決して構はないのである。が、演者の頭の上の高いことは甚だ不安を感ぜしめるものである、事實に於いて不成功に終らすことが多いのである。これは上からの空気の移動と云ふ問題ではない。が、自分の呼吸の調節の上に、上方保護は、最も緊要の大事である！ 亞米利加の大説教家ムーデーが天幕傳道に幾萬の聴衆に會する時には、必ず頭の上近く壘一枚敷ばかりの板をつるしたのを見たとき私の一友が話したことを覚えてをる。が、その時友人は何の爲にあんな板を窮窟千萬にも頭の上につるすかと怪しんだと云ふを聞いて、私はこれこそ或共の番傘であると思ふた。亞米

利加では平板、日本では番傘と——その形こそ異なるけれど、その意氣は畢竟するに同一軌である。
 以上の理論と而して實例とで、私の思ふことは大體に於いて盡したかと思ふ。否な、不完全なる處も多いであらう。が、併し演説なり、講演なりするものが常に立派な會場で許り演ずるわけには行かない。思はざる處で、豫期せざる會場に立たなければならぬことも少くあるまいと思ふ。こゝに於いてか、私共は豫めそれに對する研究も積み、覺悟をも定めてをかなければならぬのである。

聲にも人格あり

◎
 回 惡聲を修練する この演説又は講話をするに方つて「音聲がどれ
 丈け大切なるものであるか」は、今更に改めて言ふまでもあるまい。
 又音聲の好いと悪いとは、聴衆にどれ丈け快感と不快とを與へるか
 と云ふことも、既によく分つてをる。音聲が雄辯家に缺くべからざ
 る一資格であることの何人にも異論はあるまい。決して異議あるべ
 きものではないのである。

生來の音聲はどうすることも出来ない、併しそれも修練に依つて
 は、決して失望することは無い。私の親友である知名の某氏は、先

天的に鹽つから聲で、非常に聞きづらい。が、それにも拘らず、猶
 ほ演説などする場合には、何となく聴衆をチャームして、眞に雄辯
 家の雄辯を聞くが如くに感ぜしめる。殊に其のテーブルスピナーな
 どは最も秀でたものである。

これは何故であらう？ 勿論、この某氏は音聲に於いて先天的に
 不幸の人である。が、それを補ふに修辭上の苦心を以つてする。美
 辭麗句と而して巧妙なるウキツトとを以つてするからして、聴衆の
 方では、その音聲を顧みるの暇がないのであらう。若し左様である
 ならば、實に敬服すべきである。

同じ音聲にしても、大阪人のやうに「はア、そうだツか」式に極く輕
 い調子のと、「ハ、ア左様ですか」とどつしりした云ひ方とを耳にす
 る時に、聴く人にとつては、如何に感ぜられるか——聲ほど人の胸

奥に微妙なる感じを起させるものはあるまい。その人の顔も知らずその人格も知らずして、唯だ其の音聲のみを耳にする時、不知不識の裡に「あの聲は軽薄だ!」とか、或は「……實に床しい人だ!」とか、或は「……頼母しく、慕はしい!」とか感ぜしむるものである。若し四邊の暗黒にして、何等の人氣もない野原などで、心寂しく感ずる時に思はず頼母しい聲を聞く時は、何よりも力づく、十畳の座敷にをるよりも、猶ほ頼母しく思れるものである。

かう云ふやうなものであるからして、この音聲は重すべきものである。こゝに於いて私は聲にも亦人格があると云ひたい! これは未だ何人も云はない處で、餘りに奇を好むやうである。が、何人も能く考へて見るならば、確かに思ひ半に過ぐるものがあらう。それ故に、先天的に音聲のいゝものも勿論である。が、殊に惡聲の人は

それを充分に補ふ丈けの修練を積む必要があると思ふのである。

二

回雄辯五本骨とは かの話材の組立法だとか、内容の研究だとか云ふやうに、何人にも出来ることに就いては、決して研究を怠つてはならぬ。辯舌を以つて立たうとする人は勿論のことである。が、苟くも自己の意志を表しやうとするものは、漫然として語るやうなことなく、最初から充分に注意してかゝらねばならぬ。が、私は演説又は講話をするものにとつて、須臾も忘れてはならぬ五大資格を稽へて、こゝに「雄辯五本骨」と云ふものを考へた。勿論、この外に多くの資格も必要であらう。併しこゝに云ふ「雄辯五本骨」とは、私の持論であつて、及ばずながら、これを實行してをるのである。殊

に私にとつては、幾度か苦い経験の結果に得たものである。先づ私の『雄辯五本骨』の第一は單純なる可きことである。殊更に複雑なる叙述法を取るのには、聞きづらいのみならず、演者に取つても亦甚だ不得策である。出来る丈け簡單に、無用のことを省略するやうにすることが必要である。併しこれは頗る六ヶ敷いことであるかも知れない。が、その組立法なり、或は内容なりに就いて、豫め充分なる用意をしてかゝるならば、決して出来ないことではない。演説者は、この間の研究と苦心とを最も多く要するものであらうと思ふのである。

その第二は明晰なる可きことで、これは非常に大切なることである。最も適當なる處に、それに相當する言葉を用ひるとか、よく適合する實例を引用するとか云ふ場合に、若し明晰を缺く時は、折角

の苦心も水泡に歸する、私はこの明晰なること即ち曖昧ならぬことが雄辯家として、實に重きものであると思ふ。以上の二つの資格は重に言語の上にかける用語の上にかいての注意である、あゝもとれかうも取れると云ふやうな不得要領の言語を須ふることは、飽くまで慎しまねばならぬのである。

その第三は直截なる可きことである。これは或點から云へば、明晰とも似てをり、同一であるやうにも考へられる。併しよく考へて見れば、そこに區別があり、差違もある。この直截にやると云ふことが多くの人の誤る處である。自己には如何にも直截にやつてをるつもりでも、聞いてをるものには、非常に迂遠であり、その要領を捕捉するに困難なることが決して稀でない、分りやすくやると云ふことは、餘程氣を付けないと駄目になり易いものである。

例へば時節柄登山談をすると云ふ場合に、その登山の順序を語るのに、分り易くと思ふて、或は立山を説くかと思へば、富士山を語り、更に筑波山を談ずると云ふやうでは、聴衆の方では、却つて迷つて来る、どう云ふ處が主眼であるかが分らなくなつて、演者の苦心が何の役にも立たなくなる。それよりも、
分け上る麓の道は多けれど

同じ高嶺の月を見るかな

と云ふ歌のやうに、或山として説明するが好い。羊腸たる小徑を辿りつゝも、その頂上近くになれば、同一の處に達して、頂上の月を眺むる時には、同じ處にゐると云ふやうに、誰にでも分り易く説明することを注意しなければならぬ。多くの實例を擧げて説明するのはよい。が、或場合、或事柄に就いては、實例の爲に、却つて

聴衆は不得要領に陥ることが少くない。そこで私は大綱を捕へてそれを分り易く説明し、何人にも了解せしむるやうにすると云ふことを忘れてはならぬと思ふのである。

私は私の「雄辯五本骨」の第四に眞面目なる可きことを入れるものである！ 苟くも演説又は講話をするものにとつて、この心がなければ、私は聴くべきものゝ出来やう道理がないと思ふ。然るに世間には、随分この念のない人も少くないやうである。最も具體的に云へば、場當りの演説に得意になつて岐路に入り、枝葉に涉つて、遂に最初に云はむとして考へた事と反對なる結論に到着し、降壇して初めて氣の付くと云ふやうなものもある。それから「君！ どうしてあゝ云ふことを云つたのか」と問はれて、今更のやうに「さう云ふことを云つたのか」と云ふやうなものは、初めから眞面目にやる考へがな

いからである。
 この眞面目にやると云ふことには、肉體的と精神的との二方面があると思ふ。即ち精神的の方面は、前に云つたやうに、充分に確信を以つてすると否とである。演説又は講話すると云ふことが聴衆にどれ丈けの感化を與へるかと云ふことを考へると否とにある。これは何人と雖も、最初から周到なる注意をして掛るべきである。更に肉體的の方面から云へば、明日演説なり、講話なりすることが分つてをるにも拘らず、夜更しするとか、酒を飲むとかして「なアに壇上に立てばどうかなるだらうよ」など、云ふ間違つた考は、實に言語道斷と云ふべきである。之れに就いて私は苦い經驗を有つてをる。私が未だ關西學院にゐた十七八の頃であつた。ミツシヨンスクルの學生に有勝なりバイバル熱に校内の凡てが襲はれた。而して年少

氣銳の學生は、泣いて祈り、殆んど狂せむ許りに道を説き、遂に神戸教會の信者の總てを燃して、恰も凱旋將軍のやうな勢を以つて歸校したことがある。處が私と唯今參謀本部に在る武田中佐と外一名の三人は、それに満足することが出來ず、遂に廣島に行き、此處でも亦少年リバイバルリストとして、盛んに歓迎せられ、多くの信者を狂せしむる許りに喜ばした。唯だ夫のみならず、伊豫の松山教會からは、是非來てくれとの招待があつたので、私共は非常なる得意を以つて松山に行つたのである。
 然るに私共が松山教會に行つて、最も熱心に祈り、且つ狂せん許りに道を説いた。この私共の降壇した後に二十七八とも思はれる一紳士が起つて「三君の説く處は、如何にも吾々の胸奥に或物を與へた。が、吾々は何となくもの足りない處があるやうに思ふ」と云ふ

やうなことを云はれた。實に左様であつたらう。私共は心の中に云ひたいことが山程あつた。が、如何にせむ、既に私共の肉體が勞れてをつた。その旺盛なる精神の働きと肉體は同一行動に出づることが出来なかつたので、私共三人は非常に恥しい思ひをした。私は之れによつて眞面目にやると云ふことは、唯だ言辭に於いてのみでなく、肉體的にも、決して忽にするには出来ぬものであると今日でも痛切に感じてをるのである。

三

回 自在性とは何か 最後に私は「雄辯五本骨」の随一として、最も大切なるものは、自在性を有すべきことであると信ずる。これは特に説明する迄もなく、その時、その場合に應じて、集まれる聴衆の

年齢に應じ、知識階級より考へて、如何にすれば好いかと云ふことを考へるにある。而もそれを壇上に立つて、直ちに決するの機才あることである。何でもお構ひなしに喋舌りさへすれば好いと思ふやうなことなく、充分注意して掛ることである。世間には聴衆の程度とか、その時、その場合も考へず、唯だ自分の思ふ丈けを云へば、それで宜しいと考へてをるものがあるらしいそれから又中には、その場合、その時は知つてゐながらも、自分の云ふべきことを適當に演述することが出来ず、あせりながらも、もがきながらも、猶ほ悉くを述べやうとして、遂に十二分の効果を収めるべき筈のものを駄目にするのみならず、それが爲に、却つて自分の思つてをる結論に到着することの出来ないものもある。これは何れにしても餘り推稱するに足るものではない——私は如何なる場

合には、どれ丈けの時間内に、如何なる時には、どう云ふ用語を以つて自己の説を述べる——即ち自由自在に、時に應じ、その場合に随つて、演説の出来るやうにありたいと思ふのである。

言葉の選擇とは

—

□武器の鍛練如何　かう云ふ話がある——こゝに荒身の刀をほりつ放しにして、或は錆び、滲も食入つてをるやうなのを構はずに置きながら、いざ合戦と云ふ時に、その儘に提げて、敵と太刀打すると云ふやうなものがあつたならば、果して世の中の人達は何と云ふであらう。大膽と云ふか、或は無考へと申すか。平気で能く生命掛けの合戦に行かれるものだと驚くに相違ない。併し此の世間の驚きに對して、若し其の人が「怪しからんことを云ふ、俺の持つてをるものは武器ぢやないか。敵と生命のやり取りをする爲に提げて來た

ものぢやないか」と答へた場合には、その理屈はつく。が、何人にも成程と合點が行くか。勿論、その人の持つてをるのは武器である。刀には相違ない。併し其の刀が能く鍛錬したものであつたにしても荒身である、而して現在は錆び、且つ錆び朽ちてをるではないか。その錆び朽ちた荒身の刀で敵を斬り、相手を突き——生命のやり取りをしやうとするのは、確かに無謀と申さねばなるまい。苟くも武器には實質がなければならぬ。不斷に相當の手當と云ふものが加へてなければならぬ。こゝに適當の實質と手當とが揃はなかつたならば、決して武器の武器たる用をなさぬ。かの錆び朽ちた武器も、猶ほ武器であると云ふならば、何人も必ず實質と相當の手當との揃はぬ武器は、決していざと云ふ場合に、何等の役にも立たぬものであると云ふに相違ない。かく云ふことの正しいのである。然り、而

して私共は此の話と能く似通つた事實を到る處の講演壇上で、絶えず目撃してをる。さう云ふ場合に屢次逢著するのである。私共の考へる處では、この講演壇上は——必死の合戦場とも云ふべく、第二の己を多數の中に植込むか、或は多數から壓倒されて、おめく引下がるか。己が聴衆を化するか、或は聴衆に呑込まれるか。更に言葉を換へて申せば、己が生きて聴衆が死ぬか、或は聴衆が生きて己が死ぬかと云ふ——生死を眼前に決定の合戦場と云はねばならぬ。そこに提げて起つ武器は、何であるかと云へば、所謂言葉である、その言葉の基礎となる音聲である。この武器に就いて、今日まで大多數の講演者は、果して深く考へたことがあるであらうか。その己の持つてをる武器の實質はどんなものであるか。而して更に己が持つてをる武器にどの位の手當を加へて來たか。こゝに考

へ及ぶ時は、かの小話のやうに、全く鍛錬の不充分なる荒身の刀と
 選ぶ處のないものではあるまいか。
 私共は其の質を吟味すると共に、その量に就いても、之を加へな
 ければならぬ。小男が五尺何寸の大刀を振被つても、到底其の働き
 が充分なものでない。それと同時に其のものが大切な口演者の生死
 決定の境に用ふるものであることを考へて、不斷に相當の手當を加
 へ、絶えず磨いた上にも、猶ほ好く磨きを掛けなければ、これが剃
 那に用ひなければならぬものである丈けに、決して取返しが附くも
 のでない。私共は私共の生死を決すべき講演壇上の武器たる荒身の
 刀を磨ぎもせず、何等の手當も加へず、ほりつ放して、錆びれば錆
 放題、朽ちれば朽放題にして置きながら、いざと云ふ時に、これが
 武器として使へないやうなことがあつてはならぬのである。

二

回言葉研究の歴史 私は今日迄の講演者の無謀、無知と云ふか、そ
 の不覺悟千萬なのに呆れざるを得ない。再び繰返して云ふ——刹那
 に生死を裁断する武器である處の此の言葉と云ふものに就いて、不
 断に充分の安心と満足とを以つて、今日まで講演壇上に立つたもの
 があるかと。乃木將軍の先考希次翁は、壁は落ち、障子は破れて通
 から納戸迄が見透かされるやうな生活はしてをられた。が、武士の
 魂たる此の人の腰間の秋水のみは、その質に於いても、その量に
 於いても、その手當に於いても、寔に充分なものであつた。決して
 不満足はなかつた。而して希次翁は、常に他人に對して『御腰の物拜
 見!』と云ふのが口癖で、その腰の物の如何に依つて、その人を断じ

たと云ふことである。

こゝに於いて私は——今日迄の講演壇上に起つ人達に此の「御腰の物拜見！」を持出して見たいと思ふ。如何に肩書が立派であり、押出が堂々たるものであつても、その御腰の物たる言葉の手當が不十分であつたならば、その人達は壇上の人として、斷じて私共と語るに足らぬものであると申さねばならぬ。俱に辯舌道を談ずる價値のないものであると云ふを憚らぬのである。

それでは日本と云ふ國は、言葉と云ふことに就いて、これ迄も無考であつたかと云へば、決して左様でなく、古き萬葉集に現れた文字には「言靈の幸ふ國」とか、或は「言靈の助くる國」とか云ふのがあつた。その言靈とは即ち言語、音聲が含蓄すると云ふ——一種靈妙な活力を指して云ふたものである。かくの如く言語、音聲の業物で

あることに就いては、既に研究も積み、又書いたものも出てをる。これに依つて考へるも、猶ほ我が國が言葉使用に素養の無い國でないことは、既に明かであると申さねばならぬのである。

然るに或人は——左様なことはない。さう云ふ研究は近く海外から新しく輸入されたものであつて、往昔から我が國には、或は發音に關する研究だとか、或は音の有する意義の研究、調査とか、或は言葉に就いての學問と云ふものは、全然無かつたやうに考へてをる私共は其の淺墓千萬な觀察を笑はねばならぬ。近く徳川時代には「言靈の學」とか、或は「言靈の教」と云ふやうなものも現れて來て、五十音の各音にどう云ふ義理があるかと云ふことを研究されたものもある。而して之れに二種ある。即ち一行一義の説と一音一義の説とである。

その一行一義の説と云ふのは鈴木重胤の唱道する處で、これを具體的に申すならば、實に左記の如きものである。

- ア行音二、 廣厚。
- カ行音二、 堅牢。
- サ行音二、 窄小。
- タ行音二、 剛直。
- ナ行音二、 和順。
- ハ行音二、 變更。
- マ行音二、 渾融。
- ヤ行音二、 進前。
- ラ行音二、 形狀。
- ワ行音二、 採曲。

この説を更に平易に布衍したものは、加藤咄堂君の著書中に見ることが出来る。例へばサ行の義は窄小となつてをる。之を加藤君は聊か變へて「音の夫れ自身が清爽の意味を有してをる」と申してをる。或は左様であるかも知れぬ。こゝに之を實例に徴する時は——「そよそよと吹く風」とか、或は「涔々たる水の流」とか、或は「シーンとした夜の静けさ」とか、或は「さめくと泣く女の姿」と云ふやうなものである。更に之を強い意義の場合に使つても、窄小と云ふ意味に汲むことが出来る。例へば「殿下の御氣嫌はさんくであつた」と云ふやうに、頗る荒い場合に、強く使はれる形容詞である。が、その意味を押詰めれば、確かに窄小の意味を有つてをる。又カ行は堅牢とある。が、之を例示するならば、或は「剛健の氣風」とか、或は「侃々愕愕の辯」とか、或は「毅然として立つ」とか云ふやうなものである。而し

て斯く説明すれば、誰にも成程と合點される處があるであらう。

三

回 相手を知れりや 更に一音一義の説を唱道したのは、かの高橋
残夢である。これを具體的に表示すれば、

- ア、あらはるゝ義、あらはす詞。
- ウ、開けはむる象、動く象。
- ヲ、窄りたる象、暗さ、重き象。
- サ、小なる義、誘ふ義。

と云ふやうなものである。が、これ杯は未だ眞の組織的研究より云へば、大に牽強附會の傾きもあれば、滑稽、突梯の立論もあるやうである。併し恚ることの研究されたと云ふ事實は、何人も認め

なければならぬのである。

然るに今日迄の講演壇上に立つ多數の人達は、この初步の研究すらも顧みず、自己の使用する音聲、自己の働かせ得る言語が如何なる影響を及ぼす意義を有つてをるかと思ふことを究めずして、それで講演壇上に立ち、彼等は「何故に俺の云ふことを聞いてくれないだらう」とか、或は「何故に俺が之程迄に汗を絞つてをるのに聞いてくれないのだらう」とか、或は「何故に俺が誠心誠意を披瀝してをるのに其の一端を汲んでくれないだらう」とか云ふてをるやうである。が、これは實に他人を責むるに急に於て、己の爲す處を全然忘れたものであると云はなければならぬのである。

これを極く手近かに云ふならば、かの小學教師は、不斷に自分の相手にする子供が——どれ丈け言葉を有つてをるか、どれ丈けの言

葉が教へられてをるかと思ふことは、既に明かに知つてをる筈である。現實に自分が教へたより外に、子供達は外に言葉を有つてをる筈はない。その子供達に對つて、自己が教へざる言葉で解説を加へて「何故に之で分らぬだらう？」と云ふ。更に私共が地方の農村に入つて、靜かに第三者の講演を聴くならば、今更のやうに驚かされる。何故なれば、その講演者の語る言葉は、殆んど一語は一語毎に、農村の人達の大多數に取つて、實に新しい言葉であり、彼等には未だ與へられもしない言葉である。否、彼等に與へられてない言葉を以て話すのが總てと云ふても宜しいのである。

こゝに最も適切なる一例を示すならば、かの農村に於ける講演者は平然として「諸君は今日の時局に際して、如何なる覺悟を有つてをるか」と云ふ。この短い一節中の「時局、際して」と云ふやうな言葉

を果して農村に於ける一般のものが解し得ると思ふて語るのではあらうか。或は「：：：向上の一路に向つて直進せねばならぬのである」などと平氣で云ふものがある。併し「向上の一路、直進」と云ふやうな言葉は、遂に農村に於ける大多數の人達には解せられぬ。然るに發展、活動、經綸など云ふ言葉は、普通の講演者に依つて、大抵の場合に使はれてをるやうである。が、農村に於ける大多數が之を解し得ると思ふであらうか。

こゝに論より證據は、今日迄の講演壇上の叫び聲が都門には何程かの交渉があるやうである。が、若し一度地方に之が行つた場合に何等の反響も、印象も認めることの出来ないと思ふのは、畢竟するに其の言葉が分らぬ爲に外ならぬ。言葉を換へて申せば、その大事な業物が斬れないからである。それ故に如何なる場合にも會合のあ

つた後に、講師の受ける批評の標準になるものは何であるかと云へばその論旨でなく、十中の十迄は其の言葉である。つゆ程も伴らぬ彼等の告白は、殆んど異口同音に私共に對して『今日の御話は私達にも能く分りました。あゝ云ふ分る御話ならば、又も聴きたい』と云ふのが常である。現に私は大正三年中の二百九十六日を講演壇上で暮した。が、その八割迄は地方に行つてをつた。而して不斷に聴衆から得た感謝の言葉は何であつたかと云へば『貴下は善く私達にも分る言葉を使つて下さつた』と云ふことであつた。が、この反面には、過去に於いて聴いた多くの話の殆んど總てが分らないものであつたと云ふことを語つてをるものではあるまいか。

これは確かに折角引抜ひて振廻した業物が一向に斬れもせず、相應に力を籠めて叩いた心算でありながら——傷すらも附かず、叩か

れた痕も残つてゐないと云ふ事實を見せられたものであつて、武器として何等の手當も加へる處がなかつたことを認めることが出来る然り、而して何人も武器が武器として、何等の役にも立たなかつたものであることを認めない譯には行かないであらう。

四

回 平明より單純へ かく私が反覆するならば、何人にも、この言葉の選擇に注意せねばならぬことが徹底的に諒解せられるであらう而して御腰の業物の大切なるものであることも分るであらう。かう云ふやうに、言葉の選擇に注意すると云ふことは、如何なる言葉を使つたら宜しいかと云ふことである。これば『聲にも人格あり』と云ふ一章と多少の重複する處あるか知れぬ。が、最も手取早く之を説明

して見たいと思ふ。素より之も亦一行一義、一音一義の積上げられたものであることを忘れてはならぬ。先づ第一義として、私共は能く分る言葉を使ふやうにせねばならぬ。これは改めて申す迄もないことである。が、今日迄の講演者の多数には、この第一義が缺けてをること否む譯に行かぬのである。

然らば能く分る言葉は何であるかと云へば、明確なる言葉——分ると云ふことが必ずしも單純なものでない。分ると云ふ言葉を使用しやうとするには、數個の條件がある。先づ言葉の數を多く有つと云ふことである。これに就いて、海外に於ける大雄辯家と云はれた人達が如何に苦心したかは、能く著述などにも認められる。が、例へばグラッドストーンの如き大政治家ですらも、この言葉の數を餘計に持つと云ふ爲に、毎日字引から二つの新しい文字を記憶して寝

に就く習慣を附けたと云ふことである。這般の苦心を我が國で致してをるのは、竹越與三郎氏で、字引を見てをられるのか、或は詩集を繙かれてをるのか、それは私の知る處でない。が、竹越氏のやうに言葉の數を多く持つてをる方は少いやうに考へられるのである。何故に言葉の數を多く有つ必要があるかと云へば、その時と場合とに應ずる變化と云ふ問題を顧慮するから來たことで、私共の覺悟態度、働きと云ふものが場合に應じて、不斷に變化せねばならぬと共に、それに適する言葉が自ら變化すべきものであることは、こゝに改めて云ふ迄もない。これが變化する事になるとして見れば、數多き材料を有つてゐなければ、如何に變化したくとも出來ない。即ち選むと云ふ働きを持たなければならぬ。我が國では時、處、位に依つて、非常に此の言葉を選むと云ふことに注意せねばならぬやうな

ことが多い。先づ的確に云へば、こゝに「死ぬる」と云ふ言葉を例に引くことにして、やんごとなき極には崩御と云ひ、次いで薨去、逝去、卒去、死去と云ふ。而して之をくだいて云へば——おかくれになつた。おなくなりになつた。おはてなされた。たほれた。まいつた。おつしんだ。ごねた。くたばつた——と云ふやうに、その時と處と位とに依つて、いろ／＼に違ふのである。

更に夫が種類に依つて違ふことがある。例へば「鳥が死ぬ」と云へば、直ちに「いや鳥に對しては落ちたと云ふべきだ」と云ふ。それ故に「ハハア落ちたと云へば宜しいなア」と思ふてをると——魚になれば全然違つて「上つた」と云ふ。落ちたと上つたと云ふことは、全く反對の意味である。かう云ふやうなことを考へて行けば、如何にも私共が能く相手に分らせやうとするのは、言葉の數を餘計に有つて、

その中から選ぶ自由があり、こゝに其の時、處、位と心持とに應じて、最も能く欲まるものを使ふと云ふことである。而して其の結果が、聽者に的確なる印象を與へるものであると云ふことにもなるのである。

第二義は簡單なる言葉を選むと云ふことである。何故に簡單なる言葉を選まねばならぬかと云へば、かの長く、且つ複雑なる意味を持つてをる言葉を使ひ、簡單ならざる、分り苦い、聞落し易い言葉を使つてをると之れを聞いてをる中に、不圖した聯想作用が働いて思想の突發に逢つたならば、折角靜かに聽いてをる人達の頭腦の中に組立て掛けてをる思想を破壊される。これを實例に就いて考へるならば、こゝに講演者が「……諸君は我輩の論ずるが如く考へるも可無論、必ずしも考へざるも差支ない。が、何れにしても、恚る問題

を論ぜざるを得ざる次第に立到つた」と云ふならば、その意味を取るに苦しむ。聴衆には分り苦いのである。この言葉を簡単にすると云ふことに就いては、その考への土臺となる組立法や其の配列の次第に随ふものであることは當然である。若し其の考へ、組立法がこんがらかつてをれば、言葉もこんがらかつて簡単ならざるものになるのである。

五

回講話をも亦挿け 更に第三義は——間違を起さぬ——直截なる言葉を使ふことである。が、これは直截の思想に伴ふ直截の言葉で結局はくどくなく、單刀直入の言葉を使ふことである。而して更に第四義は具體的の言葉を選むことである。それは畢竟するに現代的

の意味を有つてをる言葉と云ふことで、苟くも當世に於いて雄辯家と云はれる人の話を傾聴すれば、直ちに分る。先づ之も現實に解釋して見ようと思ふ。が、今日迄に私共が何時、如何なる處で話を聞いても、必ず何等か動かされると云ふ話をする講演者で、こゝに私共が例に挙げたいと思ふものが三人ある。而して此の人達の講演は、不斷に誰にも耳にすることが出来る。曰く山室軍平君、加藤咄堂君、少しく性質は違ふ。が、曰く伊藤痴遊君。

この三君の話を聞いてをる中に、私共は何等か絶えず刺戟を受け、るやうに思ふ。而して其の大小、深淺の差別はあらう。が、動かされたと云ふ意識を以つて其の前を去らぬものはあるまい。これは何故であるか——と申せば、三君共に其の使用する言葉が常に具體的の言葉であるが爲である。更に詳しく云へば、その選ぶ言葉が悉

く現実的である爲に外ならぬ。これを卑近な例に依つて説明するならば、こゝに『左も悲しさうな顔』と云ふ處を『真青い顔をして』とか、或は『ほろ／＼と涙を濡しながら』とか。かう云ふやうに換へてしまふ。端的に、直ちに聴者をして、具體化された悲しさを了解せしむるのである。

試に山室君の話を聞くならば、而して其の速記されたものを讀むならば、その實例は所在に見出すことが出来る。かく現実的なる言葉を使ひ得ると云ふには、そこに現實なる材料を有つてをると云ふことを云はなければならぬ。第四篇に於ける『組立法の用意』中に例示した伊藤痴遊君の『作田玄輔』の一を取つて見ても、直ちに之は分るであらう。痴遊君ならぬ他の人をして語らしむるならば『二人はさんざんに揉合つた』と云ふてすます處を痴遊君は何と説いてをるか、如

何なる言葉を以つて説明してをるであらう。確かに辯舌道に入らうとするもの、深く研究せねばならぬものである。少しく方面は違ふ。が、井上角五郎氏の演説を聞いてをる場合に、不斷に私の思ふことがある。その顔と云ひ、聲と云ひ、將又態度と云ひ、決して人を魅するとか、地歩を占むるとか云ふやうな意味は何處にもない。が、事實聞いてをる時に魅せられることがある。如何にも立派に井上角五郎と云ふ人は地歩を占めた話をする人であると思はせる。それは何故であるかと考へて見るならば、この人の使ふ言葉には、現實的の言葉が多い、即ち井上氏の有つてをる材料が殆んど物と數との陳列であり、總てが現實的であるからである。この現實的な材料から出て來た言葉の利する處は、想像に依らず、推理に依らず、端的に其の話を會得することが出来ることで、之が

聽衆の最も満足する處。その満足は何處から起るかと言へば、群衆の心理の羈絆を脱することの出來ぬ聽衆は、類推に依つて合點するところが其の場合に爲し得る最大能力であるからである。

かう云ふことを考へても、私共は言葉を選びと云ふことには、不斷に大に注意せねばならぬと考へる。が、之に就いて西洋人が能く話をすることをイラストレート即ち描くと云ふ。が、これは確かに以上の四つの議論を最も能く現す言葉であると思ふ。私共は人に對して語る時に、自分は如何に描いてをるか、その描き方は確かに輪廓を明瞭に、而して比例も、調子も満足なるものとして合點されるやうに描いてをるかどうかと云ふことを考へて見るならば、如何に話すかと云ふことの最も善い參考となり、現實的に、具體化されたる描法——言葉と材料——が必要であるかと云ふことも、最も善く

分るであらう。これは苟くも辯舌道に入らうとする人達の忘れてはならぬことである。

講演者の壓力

一

精神の充實如何　かう云ふことを何人も感ずる場合があるであ
 らう——談話を聴いて、その談話其のものには、何等の價值、奥行
 も認めない、殊に其の談話者の使用する言葉の如きも、極めて拙劣
 であり、つゆ程も餘裕もなく、更に其の聲に至つては、全然聴く者
 の記憶に残る丈の質質もないと云ふ人でありながらも、猶ほ何と
 なく、その人に接して、唯だ談話を聴いたと云ふことが非常に自分
 を動かした、現實に自分は動かされてゐると云ふことを考へること
 が往々にしてあるであらう。

こゝに一例を擧げるならば、その前途に横はる目的を定めねばな
 らぬ。が、二途に迷ふてをると云ふ青年がある。この青年は獨自の
 力のみでは、その二途に迷ふ——何れを取るべきかを決定すること
 が出来ない爲に、遂に其の友人の説を叩き、更に先輩の意見を聞い
 た。而して友人も、先輩も、俱に同じ位のことを云ふたとした場合
 に、その言語、調子、材料、時間と云ふものは、寧ろ友人の方が餘
 計に掛けて云ふてをる。併し其の餘計に掛けた友人の説に依つて、
 こゝに其の目的を決定するか、或は其の三分の一にも足らぬ先輩の
 意見に依つて、こゝに其の目的を決定するかと云へば、恐らく十人
 が十人迄は、無論、その量に於いて多い友人よりも、却つて量に於
 いて少い先輩の意見に依つて、その目的を決定するものと私は思ふ
 のである。

それは何故であらう。これを私は壓力と申して見たいと思ふ。素より底力と云ふても宜しい。が、かの講演會場で之を例に引いて見るならば、その講演者が會場に入つた時に、こゝに二人の講演者が並んで入つて來たとする。而して其の一人は五尺に足らぬ小男であり、その他の一人は六尺に近い堂々たるものであると云ふ。この場合に果して聴衆は何れを聞かうと思ふであらう。私は聴衆も必ず大きい男の方が聴くべきものと思ふに違ひないと思ふ。何故かと申せば、既に大きさに於いて、聴衆は壓力を感じてをるからである。唯だ單に形骸に過ぎぬものにすらも、猶ほ人は見えざる壓力を感じるものである。況んや精神の充實、不充實と云ふ——此の二つのもものが並ぶ場合には、何れに壓力を感じ、何れに輕さを意識されるかはこゝに問ふ迄もないことである。

二

回第一要件の忘却　こゝに講演者となつて、講壇上に立つ時のやうに、講演者の準備せねばならぬものであり、不斷に備へてをらねばならぬ資格として、この壓力のやうに大切なるものは、決して外にないと申しても宜しい。然り、而して此の壓力は、多く充實の結果であつて、壓力即充實と云ふも、決して不可ないと考へる。勿論その充實には體力の充實もあれば、或は精神の充實もあらう。が、これを部分的に申すならば、或は睡眠不足の如き、或は二三日以來下痢をしてをるとか、或は聊か過勞に依つて頭痛を感じてをるとか、或は連日の連講で同一の事のみを繰返す材料が多い爲に、窃に講演者自らも倦怠を感じてをるとか、或は無理に強ひられて、不準備で

出て来たとか、或は自己の出るべき處でない處にうつかり出て、間に合せて壇上に立つと云ふ——いろ／＼の場合が、澤山あることであらう。

かく講演者が充實せぬ——不充實の場合には、決して壓力を他に加へることが出来るものでない。屢次私共が他人の講演を聴いて感ずることである。が、その講演する處を聞けば好い、若し速記で讀むならば、更に悪くない。併し現實に其の人に接して、何等の動かされるものがなく、却つて一種の輕侮と反感を催すと云ふことがある。これは文字には壓力を要せぬ。が、辯論には壓力を要する所以である。私共は日一日と我が國民の間に辯論の重んぜられ、演説、講話、講演の要求せられつゝあることを喜ぶものであり、又私共と同じやうに辯舌道に志す人達の少くないことをも充分に認めるので

ある。が、果して此の講演者にとつて、その第一要件であると云ふも、決して不可ない壓力に就いて、深く考へ、且つ如何なる時にも不斷に準備ありと語り得るものが何程あるであらう。

私共は能く語るものを知つてを、又何等の準備なくして、最も大膽に——容易に演壇上に立つものを見ることがある。而して其の度毎に私は、恰も自分の事のやうに不安と危険を感ぜぬ譯には行かぬ。唯だ單に語る——何事か演壇上に立つて語ることを能事とし、満足するものであるならば、深く私は問ふことをせぬであらう。が、苟くも其の説、主張を第三者に聴かしめやう、何等か訴へやう、更に深く感銘せしめやうとするものにあつては、然り、而して講演者として、最も能く其の効果を徹底せしめやうとするものは、これに充分に其の壓力の必要なる所以を考ふべきである。その考究如何と

云ふことは、聽て其の講演者の成功、不成功の分岐する處であると申しても宜しいのである。

三

回講演者と氣分と 更に講演者に必要なるものは、不斷に平和にして、最も愉快なる氣分を持続する——即ちニコ／＼宗の信者であると云ふことである。このニコ／＼宗と云ふことに就いては——昔から私も少なからぬ研究を致してをるものである。が、私の友人のA君は早くからニコ／＼宗に就いて考へた處があつたと見えて、或時私にニコ／＼宗の呪文を案出して、それを毎朝目が醒めると蒲團の中で必ず三度唱へてをると云ふことを話したことがある。而してA君は微笑しながら「この呪文を唱へること三度に及べば、つひ笑は

ずにはをられない」と附加したのである。そこで私も非常に面白いことに思つた。が、私は呪文などを唱へずとも、自然に、不斷にニコ／＼するやうに習慣がついてをるからして、何も友人の説に今更に感服することもないと考へてをつた。併し時にはさう行かぬことがある、往々にしてニコ／＼出来ない場合が少くないと氣付いて、遽かにA君の呪文はどんなものであらうと質問に及ぶと、さてA君の曰く「何も別に六ヶ敷ものではない、三百六十五日、僕は毎朝ニコ／＼腹立てまいソツカと三度繰返して呪する。さうすると呪文の利目は面白いもので、思はずツツと吹出すその吹出した後は實に心地が好い、何とも云へぬ氣分になる。それは床の中から起きあがるまでのことである」と相變らず微笑してをるのであつた。

私が講演壇上の人となるやうになつて、多数の聴衆を相手に、ここに真剣勝負を試みなければならぬと云ふ機会が重なるにつけて、この真剣勝負をし、けん顔でやると云ふことは、甚だ初心の講演者であつて、それが段々進めば進むほどしけんならざる顔で真剣な仕事をするやうになつて来る。結局は頗る真面目な顔で話してをつたものが次第に圓熟すると共に、ゆるやかな顔で、而して不斷にニコ／＼した顔で講演するやうになつて来る。これがスピーカーの大秘訣とも云ふべきもので、講演壇上に立つて、生面の聴衆に顔を合せた時に、その講演者が莞爾して微笑しながら、先づ其の冒頭を起すことが出来るやうになつたならば、必ず其の講演は聴衆の胸に滲込んで行くものであると云ふことを知つたのである。そこで私は此の一種の發見をやつて以來と云ふものは、不斷に易

めて講演壇上で莞爾してほゝゑんで見ようと思つて試みるのであるが、なか／＼やれるものでない。これは何人も演壇に立つた人の顔と自分が立つた時の心持ちを回顧して見るならば、必ず「成程」と思當る處があることと思ふ。ここに於いて私はニコ／＼宗の如きは、人の精神を捕へる作業をする人々は、是非とも歸依して、そのニコニコを實行しなければならぬものだと思ふのである。昔から目尻の下がつたものは、必ず仕事をすると思ふ。私は此の點に於いて目尻の下つてをるのは、ニコ／＼するに最も便宜な天賦、素質を有してをるものだと思ふ。即ちニコ／＼し易い、ここに於いてニコニコする。ニコ／＼すると云ふことは、精神作業をするものに取つて、最大、最上の秘訣であると論斷するも、決して不當ではない。私は子供の頃から「お前は目尻が下つてをる、目尻

が下つてゐる』と云はれてをつた。が、その度毎に何となく甚だ弱い
 柔かい、意氣地のない、不徹底なものゝやうに思つてをつた。子供
 ながら甚だ遺憾に思ふてをつた。然るに後年私が京都に遊んで、洛
 外の等持院に足利十三代の木像を見た時、初めて『これ有る哉!』と
 一種の謎が解けたやうに思ふと共に、『お前は目尻が下つてをる』と云
 はれたことが満足此の上もないやうに思つた。足利一家の目尻は皆
 下がつてをる。殊に眞の意味に於ける幕府の建設者たる尊氏、並に
 之を繼承して大をなした義満の如きに至つては、大いに、大いに目
 尻が下つてをる。彼等は確かにニコ／＼するに便宜な相貌を持つて
 をつたと同時に、必ず其の成功はニコ／＼した處に負ふこと少くな
 いと、私は信じて疑はないのである。私は此の下つてをることと、
 この便宜なる相貌を活用しやうと云ふ心掛けとに於いては、敢て尊

氏、義満に劣るものではない。再び繰返へして申す。この此の下つ
 た奴が仕事をすると云ふことは、少くとも私は事實であると信ずる
 のである。

如何なる時、如何なる場所に於いても、若し心からニコツとする
 ものであれば、その人は必ず仕事をす。講演者としても亦必ず
 成功するものであると云ふことが出来ると思ふ。不斷に私はニコニ
 コ宗の信徒であつて、ニコ／＼宗に歸依すること誠に此の如く、そ
 の實行に於いては、斷じて人後に落ちないと自から信じて疑はない
 ものである。と同時に、又辯舌道に深く志す私は、不斷に平和にし
 て、最も愉快なる氣分の持主であることを窃に誇り得るのである。
 かの講演者の壓力と云ひ、更に氣分と云ひ、それ丈け深く注意する
 もものもないやうである。が、若し斯道の第一人者たらんと欲するも

のは、その準備を致す際に、決して此の事を忘れるやうなことがあつてはならぬのである。

第三篇 批評

雄辯研究の第一義

回登壇前の準備は、不斷に老大家の講話、演説を聴く機会にのみ出會つてを、青年諸子に觸接する機会が甚だ少かつた私は、最近に青年諸子に依つて公開された雄辯會に列席して、非常に愉快を感じたことである。先づ最も私の近來にない愉快を覺えたことは、全體を通じて意氣の頗る旺盛といふことと、その舌に如何にも清新の氣の充ちてをるといふことが少からず認められたことである。これを當日の諸辯士の口を藉りて云ふならば、今迄私が常に觸接し、

絶えず耳にしてをる處の話の多くが所謂官僚的であつたからして、殊更に何者にも拘束されないで、總てに於いて發足點に至つてをられる青年諸子の話を聽いてをる間に、自分の頭腦にヒシ／＼と應へたことは、如何にも思想が新しい、それから材料の扱ひ方にも、又其の材料に依つて下す解釋の様式に於いても、清新といふことは全體を通じたものであつて、前後數辯士の話を聽いて、遂に私は倦む處を知らなかつた。が、併し唯だ賞めてばかりをつては自分の立場としての批評といふ責任を果すことが出來ぬ。そこで一、二丈け、こゝに所謂白玉の微瑾とも云ふやうなものを強ひて拾ひ上げて陳べて見ようと思ふのである。

呼吸の調和とは、そこで先づ第一に私が感じたことは、その意氣は頗る旺盛である。併し何れの辯士にも通じて、私の感じたことは、その意氣の旺盛に比較して、その呼吸が續かぬといふことであつた。一體に意氣は頗る奔放、自由である。が、この意氣を傳達すべき呼吸といふものが甚だ不充分なものであつたやうに思はれる。かの呼吸を保つといふことに充分なる覺悟を持つて居つた人が少かつたやうに認められた。自分の語らんとする意義は精神的には斯ういふ地步を占めなければならぬものである。随つて此の程度の辯論に對しては、この位の呼吸を保たなければならぬ、この位の程度の呼吸に依つて之を傳達しなければならぬといふ其の呼吸の分量、或は高低、大小といふことを計量して、而して之に依つて自分の思想傳達を試みたと云ふ自覺のあるものが何人あつたであらう。

そこで第一に彼等には登壇前の用意に於いて聊か未だ不充分なる處があると認めざるを得ない。既に呼吸の程度を自分で自覚して定めることが出来ぬ爲に、語る間に自分の考へが高調して来る。而して大に聴く者も熱して来る、之に乗じてこゝに漸層の力を示さなければならぬといふ場合に、肝腎の呼吸が之に伴つてゐない、即ち意氣が益々旺盛になるに随つて、却つて呼吸は愈々凋落するといふやうな傾きがあつた。某氏の如きは此の弱點に附入られて「簡單!」と云ふ評を受けたのは、必ずしも論理が透徹しないと云ふ意味でもなければ、又辯論が冗長であること云ふ結果から来たのでもない。努めて聴かんとする者に甚だ壓力なき呼吸に依つて辛うじて意思を傳達して行くと云ふ其の遣り口が畢竟聴衆をして物足らなく覺えしめ、随つて倦ましめ、解決に急がしめたのであらうと私には思はれた。そ

れで先づ私共の考へなければならぬことは、自分の云はんとする處と其の時間と之に對する聴衆の態度と云ふものに依つて、自分の呼吸は果して之に應じ得るかどうかと云ふことを計量して、而して之を續けなければならぬと云ふことではあるまいか。

第二は此の呼吸を扱ふと云ふことに於いて甚だ不満足を感じられる。既に呼吸を保つことが出来ない、随つてもう少し云ひたい、もう少し高調したい、もう少し突込みたいと考へても、既に呼吸の分量に於いて持合せが足りない、随つて之を伸縮し、之を高下し、之を自由に取扱ふと云ふことが出来なかつた。こゝに於いて考へなければならぬ問題は、絶えず自分が自分の扱ふ呼吸と云ふものを自由に統御することが出来ると云ふ準備と自覺とを持つて、常に語つて行かなければならぬと云ふことである。

それから第三は呼吸を保つことが出来ぬのみならず、扱ふことが出来ぬ許りでなく、呼吸に扱はれる、却つて辯士が逆に呼吸から扱はれる。主體たるべき思想が從體たるべき呼吸に依つて高下されると云ふ傾向が大分認められた。で、會場の大、聴衆の熱と云ふやうなものに釣込まれて、自然に此の呼吸と云ふものは精神的に平調を失ひ易いものである、ともすると先づ開口一番、初めの二三分間に於いて場内を引締めなければならぬ場合に、所要の呼吸の程度よりか餘計に話し過ぎる、引締めると云ふよりか、寧ろ突放し過ぎると云ふ傾向のあるのは、一體に此の壇上に立つ人の経験する處である。それであるからして、先づ呼吸の扱ひ方と云ふものは、少餘程注意して掛らなければならぬのである。が、大概の人は其の一番初めの呼吸が甚だ奔放、而して粗大である、つひ奔放なる儘に、粗大なる儘

に、呼吸に導かれてズツト仕舞ひまで通してしまふ。で、聴く者は不必要なる場合に高き聲、或は強き響と云ふやうなものに依つて不必要なる刺撃を受けてをる。それで必要なる場合になつても、同じ程度の呼吸に依つて解説を加へられると、もう既に引續いた強度の刺戟で好い加減に疲勞を感じるやうになつて來るのである。以上述べたやうなことは、先づ是は登壇前の準備と云ふことに考へなければならぬと思ふ。が、即ち登壇前の準備は呼吸を練ると云ふこと、是は不斷に自己の扱ふべき呼吸を絶えず統御して行く練習と云ふものを積まなければならぬ。この時間の長さ注意の深さといふものに依つて、自らにして其の結果が登壇の後に現はれて來るものと考へなければならぬのである。一體に日本人は話すと云ふことを舌で話すやうに心得てをる。或

は口で話すやうに心得てをる。聊か進んだ者は話すといふことは咽
喉で話すといふやうに考へてをる。是などは餘程進んだものであつ
て、私共が能く人から訊ねられる問題は、貴下は咽喉のお手當はど
うなさいますかと云ふことである。が、この呼吸の調節、呼吸の練
習と云ふことは、非常に私共登壇者の考へなければならぬことであ
ると思はれるのである。

三

回口に缺點なきや、それから次に考へて見たいと思ふ點は、既に
呼吸に於いて練方が足りないと思はれると共に、その呼吸の出口で
ある口である。この口に各辯士とも皆共通の弱點を持つてをられた
やうに認められた。この口の弱點は先天的に有る者もある。例へば

口の形、或は齒並び、或は齶の形状、かう云ふやうなものに依つて
造られた先天的の弱點を持つてをられた方もあり、又後天的に不注
意の結果が口に弱點を持たせたかと云ふやうな方もあつた。例へば
次の言葉を發せんが爲に、準備的に口を早くから開けてをると云つ
たやうな後天的の弱點を持つてをる方もあつた。が、この口と云ふ
ものは注意しなければならぬ處で、聴衆の注目を中心點は何處にあ
るかといへば、無論、演者の顔である。が、この目と口の二つに於
いてどちらが絶えず動いてをるかといふことを考へて見れば、目は
殆ど固定してをるが口は絶えず動いてをる。随つて聴衆の意識した
注意の焦點と云ふものは、大部分口に向けられてをると云ふことを
忘れてはならぬ。目が演者の決意を示すが如くに、口は又演者の其
の決意を裏書するものである。その裏書をすべき口が若し決意の裏

切をするやうな働きを執るとしたならば、一箇の顔に於いて二箇の矛盾したる動作が行はれてをると云ふことを忘れてはならぬ。要するに口を緊める、發語したならば、その語尾を必ず唇に依つて結ばせると云ふことを心得てをる人が少いぢやないかと思はれた。それだけでなく、この口と云ふものは力を現はすよりは、寧ろ軟かさを現はすものである、口は餘程其の緊りを付けても温き感じのするものであり、軟かき感じのするものである。この口の結び方の強弱、確實、不確實と云ふことが所謂語る處の意義をして軟かくも、硬くもさせるのである。こゝに於いて第二段に私が考へて貰ひたいと思ふ點は、是も同じく登壇前の用意に屬すべきもの、平素の習練に屬すべきものである。が、如何に口を緊むべきか、如何に唇を動かすべきかと云ふことである。

四

回態度を如何する 第三は態度の點である。が、この態度は自覺と決心と云ふものに依つて定まるものである。所謂態度の基礎は自覺と決心である。と云ふことが出来ると思ふ。この點に於いて部分的には多少の弱點を持つてをられたやうである。が、その意氣旺盛にして、清新なる思想に富んでをる青年諸子だけに、確なる自覺の上に立ち、充實した決心を持つて登壇した結果として、態度は非常に立派なものであつた。是は則ち前に口と呼吸を論じたと同じやうに平素の練習、或は覺悟と云ふものが精神上に現はれたものであつて決して演者の態度には登壇後の態度と云ふものがあるべき筈のものではないのである。

唯だ一、二の私の目に留つた處を云へば、何れも手を甚だしく邪魔にした。それで手の位置を絶えず變へて、或は腰に取り、或は背後に廻し、又は一を前に取り一をポケットに納めた。そのいろ／＼の態度の構へ方に於いての違ひはあつた。が、その違ひ方が餘り時間を持たずに違へられた。之を要するに手を邪魔にされたので、聴衆の方から云へば、絶えず其の手が不必要に其の位置に安んぜずしてまごついてをるやうに認められる爲に、辯士の立場をして弱からしめたやうに思はれる。一度腰に取つたならば、少し自分是不釣合だと思ふても、少くも此の位置は一、二分は動かすべき性質のものではない。動かすならば、卒然として動かさずに、徐に大きく動かすと云ふ態度を執つたならば、餘程聴衆の方から云つても見宜い、又大きく動かさなければならぬと云ふことを考へたならば、演者の

方から云つても、動かすには、それ／＼意義のあるやうにして動かすといふ考へも付いて來るであらうと思ふのである。

五

回時間言語及音調 以上で略ぼ私は各辯士に通じて云はんと欲する處を述べたと思ふ。が、今度は第四に附加へて考へて見たいと思ふことは、時間、言語、音調に對する考へも持つて貰はなければならぬと同時に、多數の演者が壇に立つ時には、前の人の持つた時間と後の人が持つべき時間と其の間に挟まる自分と云ふことを考へて前後首尾相通じての時間と云ふものに、もう少し考へ持たなければならぬ。それと同じ意義に於いて言語にも、音調にも、矢張り比例釣合と云ふものに依つて、如何に物が美化され、如何に物が見榮え

良くなるか。否な、聞き良くなるかと云ふことを考へて貰はなければならぬ。總じて長過ぎたと思ふ。時間も長過ぎるし、言語も多過ぎる。それから音調も高過ぎた、所要の分量よりか皆多かつた。殊に挿話を澤山使つた人が多かつた。が、挿話の言語、音調、時間が今云ふた弱點を皆具へてをつた、その爲に本論を助くべき傍系の小話が是が本論ぢやなからうか、是が辯士の語らんとする中心點ではなからうかと誤解されるやうな感じを起させたことがあつたやうに思はれる。是は損なことで、雄辯の條件は簡單なること、それから明確なること、それから直截なること、この三要素を具へたものである。辯士の既に堂に登つたものであると云ふことは承認することが出た。が、奥を敲かれるのは未だ聊か時間があるのぢやなからうか。随つて私共の即ち聴衆の奥を敲かれると云ふことにも、少し

く距離が未だあるのではないかと思はしめたのは、甚だ惜しむべきことであつた。

こゝに私は無遠慮に、眞に白壁の微瑾とも思はれるものを力めて誇大にして批評をして見た。之を注意されると云ふことがあつたらば、既に今日迄充分に話材の選擇に於いて、それから之を進めて行く意氣に於いて充實されたる立場を持つてをる諸氏が眞に雄辯の雄辯たる域に到達することは、應に一舉手一投足のことであらうと思ふのである。

聽衆として

回雄辯家の資格は私には未だ今日のやうに雄辯と云ふことの注意されなかつた頃——世の中の人達が此の雄辯なるものが處世の一要件であり、且つ自己の意見の表證器として、十二分の研究をなさなかつた時からして、非常に斯道に心を須いてゐた一人である。私共と同じクラスメートで、その將來は口舌を以つて立つべき神學生でありながらも、猶ほ此の事に考へ及ぶものゝ多くなかつた頃に、私共三四輩は演説會など云ふものがあれば、先んじて行き、自ら進んでその衝に當つたものである。及ばずながら努めて今日に至つたので

ある。かう云ふやうに私は辯舌道に特別の感興を持つてをたつたことであるからして、他の辯舌に對しても、不斷に批評的態度を持つてをたつたものである。そのスタイルから、演説の構造、その内容に至るまで及ぶ丈けの研究をして見たものである。而して私自身では多少得た處があるやうに思つてをるのである。

世間では、唯だ雄辯家と云へば、演説する人、講話する士として別に立入つて其の種類を分けやうなどすることをしないらしい。否、私共の方から申せば、世間には未だ雄辯に對する真正の具眼者が甚だ多くないと思ふ。嚴正なる批評を敢てなし得る丈けの人が非常に少いやうである。よく誰でも雄辯家と云へば、島田三郎氏を擧げて、島田氏の雄辯を稱する。如何にも島田氏の辯は、滔々數萬言その云はんと欲する處を云ひ、その論ぜむと欲する處を悉すと云ふ

概はある。所謂懸河の辯舌たることに於いては、私と云ふと雖も、敢て異論はない。世人と共に、これを推稱するに吝なるものではない。併し島田氏を雄辯家と云ふことになれば、私は千萬人に抗して之を拒まなければならぬ。私は世人に同意することが出来ない。何故なれば、かの島田氏は能辯家であつて、雄辯家ではないからである。繰返して云ふ—— 慙る辯舌を以つて、決して雄辯と云ふことは出来ないのである。

私は敢て奇を好むと云ふのではない。が、島田氏に對して、かの江原素六氏は、その聲量に於いて、その修辭に於いて、その比喩に於いて、その學識に於いて、或は一籌を輸するかも知れぬ。確かに遜色はあるであらう。而して私共が江原氏の演説を數回聴く間には「又か？」と云ふやうに、同一のことを云ふ。が、私はその度毎に、

江原氏の演説を聞く度毎に、何物をか感得するやうに思ふのが常である。何となく私共の胸に共鳴する或物を感じるのである。私は島田氏に雄辯家たることを拒む。併し江原氏に對しては、進んで雄辯家たることを主張するものである。

かくの如く辯舌の眞價値は、その辯そのものではない。若し辯そのものが雄辯家の第一資格であるならば、かの三宅雪嶺博士の如きは、遂に落伍者であらねばならぬ。が、その事實に於いては左様ではない。否な、或意味に於ける大雄辯家である。今日の我が國に於ける雄辯社會が有する一のプライドであると云ふも、決して差支あるまい。こゝに於いて若し私に眞正の雄辯家とは誰であるかと問ふものがあつたらば、過去の人には云ふまい。現在にあつて、私の親しく聴いた人の中で、私は二人の眞正の雄辯家を得たと申したい。私

の見て以つて、その質に於いて、その量に於いて申分のないと思ふ
 丈の二人を得たと申したのである。
 その一人は山室軍平君である。而して他の一人と云ふのは宮川經
 輝氏である。勿論、この二人に就いて、私は大小總ての演説を聞い
 たと云ふのではない。殊に山室君に就いては「この時であつた！」と云
 ふことは出来ない。が、私は山室君が眞摯なる態度と熱烈なる辯と
 而して確乎不動の信念とを以つて壇上に起つ時、この人こそ眞正の
 雄辯家であると思ふ念を禁ずることが出来ない。それから宮川氏の
 演説は、この近頃聴く好機會がない。併し宮川氏が曾つて「神こゝに
 あり！」と云ふやうな調子で、天を指し、天井を見る——その姿の如
 何にも辯舌と調和し、渾成したる妙趣は、今以つて忘れることが出
 来ない。私の頭腦に明白に刻せられてをることを感ずるのである。

二

私は此の二人の雄辯家を得たることを窃かに快としてをる、而して
 學ぶ處が少くないのである。

回いろくの感想　かく私は私の尊敬する先輩の演説振りに對し
 て、こゝに敢て批判を試みた丈けでなく、不斷に私は私の職業柄よ
 り考へて、かの雄辯家と云はれる人々の演説、講話を聴き、最も公
 平にして、つゆ程も忌憚なき批判を致したいと云ふことは、絶えず
 念としてをる。併し思ふやうに行かぬ。その機會が多くないので、
 充分に私の觀察した處を披瀝することの出来ないのは、頗る遺憾に
 思ふ處である。が、私は日頃から考へてをることがある。それは外
 でもない。世間から演説家と云はれ、又は雄辯家と云はれてをる人